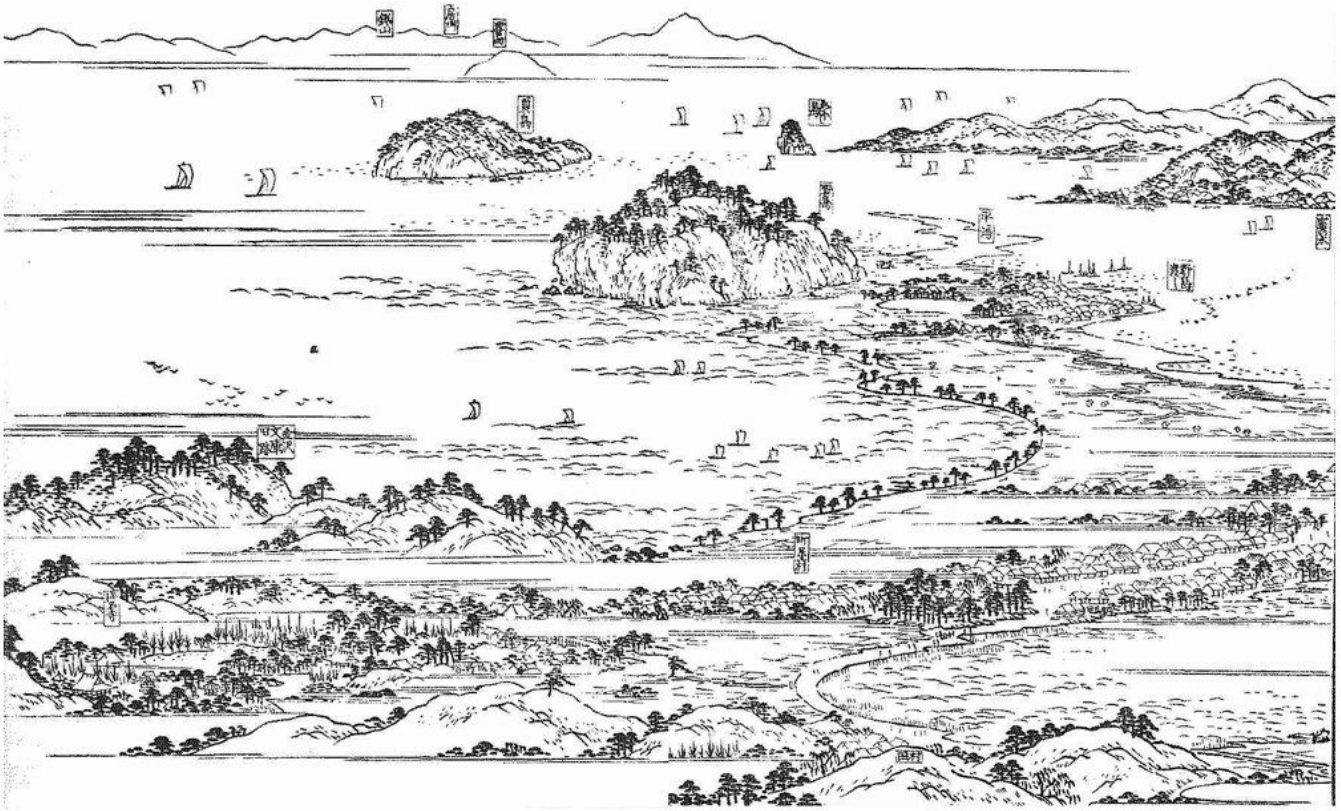
かねさは今昔物語



かねさは今昔物語

金澤の歴史を訪ねて

大道よもやま話

はじめに

金沢は横浜市の東南部、三浦半島の付け根に位置し、野島貝塚で知られるように、縄文の時代から人が住んでいた歴史のある場所であります。かつては風光明媚な地として知られ、鎌倉にも近いことから中世以降の貴重な歴史的な文化遺産の多い地域であります。

古くから金沢を見て来られた方は、何百年と伝承された伝説や昔話で語られている多くの歴史的な遺産、自然豊かな景勝地などが、近年、押し寄せる都市化の波で姿を変え、忘れ去られていることを残念に感じているのではないのでしょうか。

かねてから、金沢の歴史と変遷を次の時代に語り継がねばならないと、あれこれ思料していたところ、幸いにも諸先輩方が残された金沢の文化、史跡、風習等を調査した歴史的にも貴重な資料を拝誦する機会を得ました。その中から関心度の合いの高いものや、誰もが興味を懐き、記憶に残していただきたい事柄を中心に、時代順に整理して小冊子として纏めました。

歴史の宝庫である金沢に思いを巡らすとき、家族や友人と郷土について楽しく語り合うときに手元に置いていただけたら幸いです。

平成二十八年二月

目　　次

はじめに……1
金澤の歴史を訪ねて……8
1. 太古の金沢……9
（1） 夏島貝塚……9
（2） 野島貝塚……9
（3） 称名寺・薬王寺貝塚……9
（4） 青ヶ台貝塚……10
（5） 瀬ヶ崎和田山遺跡……10
（6） 御井戸（神明森）・寺前貝塚……10
（7） 室の木遺跡……10
2. 鎌倉以前の金沢……10
（1） 日本書紀に名が残る久良岐（くらき）……10
（2） 布久良（ふくら）から六浦（むつら）へ……11
（3） 巨勢金岡（こせのかなおか）と筆捨て松……11
（4） 富岡（とみおか）の地名……12
（5） 大津波で海没した長浜千軒……12
3. 鎌倉時代の金沢……13
（1） 瀬戸神社……13
（2） 琵琶島弁才天（びわしまべんざいてん）……14
（3） 富岡八幡社（とみおかはちまんしゃ）……14
（4） 金沢四石……14
（5） 瀬戸神社で起きた仇討（あだう）ち「放下僧（ほうかぞう）」……15
（6） 源範頼（みなもとののりより）と太寧寺（たいねいじ）、薬王寺（やくおうじ）……15
（7） 朝比奈峠と大道……16
（8） 鼻欠地蔵（はなかけじぞう）……17
（9） 渡し場……17
（１０） 塩嘗地蔵（しおなめじぞう）と熊野神社……17
（１１） 金沢（かねさわ）の地名の由来……18
（１２） 北条定顕が造営した瀬戸橋……18
（１３） 釜利谷と鍛冶匠（かじしょう）……18
（１４） 金沢北条四代と金沢文庫と称名寺（しょうみょうじ）……19
（１５） 三艘（さんぞう）、象ヶ谷（ぞうがやと）、金沢猫（かなざわねこ）……20
（１６） 三艘の文殊堂……20
（１７） 兼好法師（けんこうほうし）（吉田兼好）と金沢……20

（１８）　日蓮上人と金沢（にちれんしょうにん）……21
（１９）　船中問答（せんちゅうもんどう）……21
（２０）　荒井妙法と仁王尊（あらい みょうほう　に おうそん）……21
4.　足利持氏と金沢（あしかがもちうじ）……21
（１）　大道の関所（だいどう）……21
（２）　引越の切通し（ひきごえ）……22
（３）　太田道潅と山吹の里（おおたどうかん）……22
（４）　小栗判官と照手姫（おぐりはんがん　てるてひめ）……22
5.　江戸時代の金沢……23
（１）　金沢八景……23
（２）　金沢八銘木（はちめいぼく）……25
（３）　金沢七井（ななせい）……25
（４）　慶珊寺と豊島刑部明重（けいさんじ　とよしまぎょうぶあきしげ）……26
（５）　野島百軒と塩風呂……27
（６）　咳神様（せきがみさま）……27
（７）　榎 地蔵（えのきじぞう）……27
（８）　まわり地蔵……27
（９）　入 定 塚（にゅうじょうづか）……28
（１０）　泥亀新田と牡丹園、大橋別荘（でいき）……28
（１１）　横浜唯一の大名米倉様（よねくらさま）……29
（１２）　江戸城金沢の間の障壁画……29
（１３）　権現山と東照宮（ごんげんやま　とうしょうぐう）……29
（１４）　金沢に縁のある謡曲（ようきょく）……30
6.　明治・大正時代の金沢……30
（１）　別荘地金沢（べっそう ち）……30
（２）　伊藤博文と明治憲法……31
（３）　製塩の廃業と海苔養殖（のり）、蓮根栽培（れんこん）の普及……31
（４）　町 村 分 合 改 称 令（金沢村、六浦荘村（むつうらそうそん）、峠 村（とうげむら）（朝比奈））……31
（５）　義務教育（ぎ むきょういく）の始まり……31
（６）　トンネルの開通による交通等の発達……32
（７）　金沢の有名人……32
7.　昭和時代の金沢……33
（１）　鉄道が開通……33
（２）　戦争の足音と終戦、高度成長……33
（３）　上行寺東（じょうぎょうじひがし）やぐら郡遺跡（ぐんいせき）の発見……34
8.　明治・大正・昭和の六浦（むつ ら）……35

（１） 六浦藩から六浦県へ……35
（２） 六浦地域やぐら群の調査……35
（３） 念仏講と庚申講……36
（４） 三分小学校の開校……36
（５） 六浦荘村が誕生……36
（６） 池子随道の完成……36
（７） 瀬戸神社へ合祀……36
（８） 塩専売法の施行……36
（９） 白山道隧道の開通……37
（１０） 最初の国勢調査……37
（１１） 関東大震災による大きな被害……37
（１２） 湘南電気鉄道の開業……37
（１３） 県営住宅の建設……37
（１４） 大道国民学校（大道小学校）が開校……37
（１５） 金沢区の独立……38
（１６） 朝比奈新道が開通……38
（１７） 東洋化工の大爆発……38
（１８） 大道中学校の開校……38
（１９） 大道・朝比奈地区山林開発……38
（２０） 平潟湾の埋立……39
（２１） 笹下釜利谷道路（笹釜道路）開通……39
（２２） 阿弥陀三尊像が重要文化財に指定される……39
9. 金沢の寺院……40
（１） 富岡山（ふこうさん） 長昌寺（ちょうしょうじ）……40
（２） 花翁山（かおうさん） 慶珊寺（けさんじ）……40
（３） 地福山（じふくざん） 宝珠院（ほうじゅいん）……40
（４） 海照山（かいしょうざん） 持明院（じみょういん）……40
（５） 楞迦山（りょうがさん） 悟心寺（ごしんじ）……40
（６） 海蔵山（かいぞうさん） 太寧寺（たいねいじ）……41
（７） 赤井山（あかいさん） 正法院（しょうぼういん）……41
（８） 北嶺山多聞寺（ほくれいさんたもんじ） 金蔵院（こんぞういん）……41
（９） 護法山（ごほうさん） 満蔵院（まんぞういん）……41
（１０） 竹巌山（ちくがんさん） 禅林寺（ぜんりんじ）と荒痛文殊（あらいたもんじゅ）……41
（１１） 福松山慈眼寺（ふくしょうさんじがんじ） 自性院（じしょういん）……42
（１２） 白山（はくさん） 東光禅寺（とうこうぜんじ）……42
（１３） 寿楽山（じゅらくさん） 長生寺（ちょうしょうじ）……42

（１４） 日光山（にっこうさん） 千光寺（せんこうじ）……43
（１５） 常見山無量院（じょうけんざんむりょういん） 光傳寺（こうでんじ）……43
（１６） 高栄山高照寺（こうえいざんこうしょうじ） 宝樹院（ほうじゅいん）と大道山（じょうふくじ） 常福寺……43
（１７） 六浦山（ろっぽさん） 上行寺（じょうぎょうじ）……44
（１８） 吼月山（くげつさん） 泥牛庵（でいぎゅうあん）……44
（１９） 昇天山（しょうてんさん） 金龍禅院（きんりゅうぜんいん）……44
（２０） 野島山（のじまさん） 染王寺（ぜんのうじ）……44
（２１） 知足山（ちそくさん） 龍華寺（りゅうげじ）……45
（２２） 福船山（ふくせんざん） 安立寺（あんりゅうじ）……45
（２３） 法爾山（ほうにざん） 天然寺（てんねんじ）……45
（２４） 嗣法山（しほうさん） 伝心寺（でんしんじ）……45
（２５） 三療山医王院（さんりょうさんいおういん） 薬王寺（やくおうじ）……46
（２６） 此木山（しぼくさん） 宝蔵院（ほうぞういん）……46
（２７） 金沢山（かなざわさん） 弥勒院（みろくいん） 称名寺（しょうみょうじ）……46
（２８） 高照山（こうしょうざん） 三宝寺（さんぼうじ）……46
（２９） 見谷山（けんこくさん） 浄林寺（じょうりんじ）……47
（３０） 日輪山（にちりんさん） 旧・円通寺（えんつうじ）……47
（３１） 金剛山（こんごうさん） 嶺松寺（れいしょうじ）……47
（３２） 福寿山（ふくじゅさん） 能仁寺（のうにんじ）……47

10. 金沢の神社……48

（１） 瀬戸神社……48
（２） 琵琶島弁財天（びわじまべんざいてん）……48
（３） 富岡八幡宮……48
（４） 手子神社（てこじんじゃ）……48
（５） 小泉弁財天（こずみ）……49
（６） 寺前八幡神社（てらまえはちまんじんじゃ）……49
（７） 町屋神社（まちやじんじゃ）……49
（８） 洲崎神社（すざきじんじゃ）……49
（９） 浅間神社（せんげんじんじゃ）（谷津）……50
（１０） 稲荷神社（いなりじんじゃ）……50
（１１） 熊野神社（くまのじんじゃ）（柴町）……50
（１２） 熊野神社（朝比奈）……50
（１３） 浜空神社（はまくうじんじゃ）……50
（１４） 諏訪神社（すわじんじゃ）……50
（１５） 浅間神社（三艘）……51
（１６） 山王神社（さんのうじんじゃ）（山王様）……51

11. 江戸名所図会に見る金沢の名所 52
（1） 能見堂　擲筆松（てきふでまつ） 52
（2） 瀬戸橋　東屋 53
（3） 侍従川　光傳寺 54
（4） 六浦　上行寺 55
（5） 金龍院　飛石 56
（6） 町屋村　龍華寺 57
（7） 三艘ヵ浦の古事 58
（8） 鼻欠地蔵 59
大道よもやま話 60
（1） 大道の歴史 61
（2） 大道という地名の由来 62
（3） 大道の巡り歩き 63
（4） 大道の屋根替え 65
（5） 大道の青年会 66
（6） 大道の四季 67
（7） 侍従川の思い出 68
侍従川賛歌 71
あとがき 72
「参考文書」 73

金澤の歴史を訪ねて

1. 太古の金沢

金沢周辺の貝塚は夏島貝塚が約 9,500 年前、野島貝塚が約 7,000 年前に遡ることができ、海上の小島や岬の先端にあったようです。陸地とは近く干潮時に渡渉できた場所で、人々は食べ物をとったり、外敵や猛獣を防ぎやすい小高い場所に住んでいたものと考えられます。

称名寺・薬王寺貝塚は約 4,000 年前、青ヶ台貝塚は約 4,000 年前のもので、この時代は、激しい地形変化が繰り返され、今まで金沢全域にわたり奥深くまで入り込んだ海が後退し、谷間や山裾が陸地に変化し、人々は周辺の山裾の海に近い場所へ移り住んだものと思われます。

また、六浦、釜利谷などから流れ出す土砂が海流に運ばれ、野島から寺前周辺が浅瀬となり、袋のような内海が生まれ平潟湾をはじめ風向明媚な金沢が出来たのではないかと推測されます。

瀬ヶ崎・御井戸（寺前・神明森）・寺前八幡社の各貝塚は約 1.000 年～2,000 年前のもので、この頃になると人々は一定の場所に定住し、次第に集落を形成し生活するようになったと考えられます。

【夏島貝塚から出た土器、石器】

（１） 夏島貝塚

横須賀市夏島にある縄文時代早期の貝塚。昭和二十五年、三十年に明治大学考古学教室により発掘調査が行われ、9,500 年前後の日本最古の貝塚の一つであることが判明しました。夏島貝塚は、三層からなり第一層から撚糸文（二本以上を合わせて撚りをかける）を特徴とする夏島式土器など、縄文時代早期の生活文化を知る貴重な遺跡が出土しています。

（２） 野島貝塚

野島山頂と北川斜面の二箇所から発見された約 7,000 年前の縄文時代早期の貝塚で、マガキ、アサリ、カリガネエガイ、オニアサリなど 30 種以上の貝が確認され、横浜市内最古の貝塚であります。

（３） 称名寺・薬王寺貝塚

称名寺境内一部や金沢町・寺前町一帯九箇所が分かっている貝塚、内七箇所は称名寺赤門・薬王寺周辺にあり、約 4,000 年前の縄文時代中期から後期のものです。出土品は称名寺式土器や漁労具・魚骨・イルカ骨・貝類が多数出土しています。

（４） **青ヶ台貝塚**

釜利谷東四丁目の青ヶ台団地附近にあった約 4,000 年前縄文時代中期から後期の集落遺跡です。貝塚には竪穴住居跡・敷石住居の一部・人骨・土器・石器・漁労具・動物骨・魚骨等が大量出土しました。昭和四十二年（1967 年）宅地開発で全容解明前に破壊されました。

（５） **瀬ヶ崎和田山遺跡**

横浜南共済病院南側から横須賀市追浜（雷神社の裏）にかけての丘陵にあった遺跡です。弥生時代後期（1,000～2,000 年前）の小形壷が出土し、平潟湾周辺の金沢入海に弥生人が存在したことを裏付け、調査の結果「中世やぐら」が数多く確認されています。

（６） **御井戸（神明森）・寺前貝塚**

御井戸近くで発見された貝塚、薬王寺南東にかけて大樹が茂る森があったことから神明森貝塚とも言います。学術上は称名寺貝塚同様の中世期から近世にかけて（約 4,000 年前）の遺跡です。

（７） **室の木遺跡**

昭和二十八年（1953 年）に存在が確認された遺跡です。その後、昭和四十五年に関東学院大学が校庭拡張工事を開始した際に調査、発掘が行われましたが、縄文、弥生時代から中世期にわたる大量の土器類が出土しました。大部分が凡そ 5,000 年以前の縄文時代前期のもので「十三菩堤式土器」と土器材料の黒曜石（こくようせき）などが発見されました。

2. 鎌倉以前の金沢

（１） **日本書紀に名が残る久良岐（くらき）**

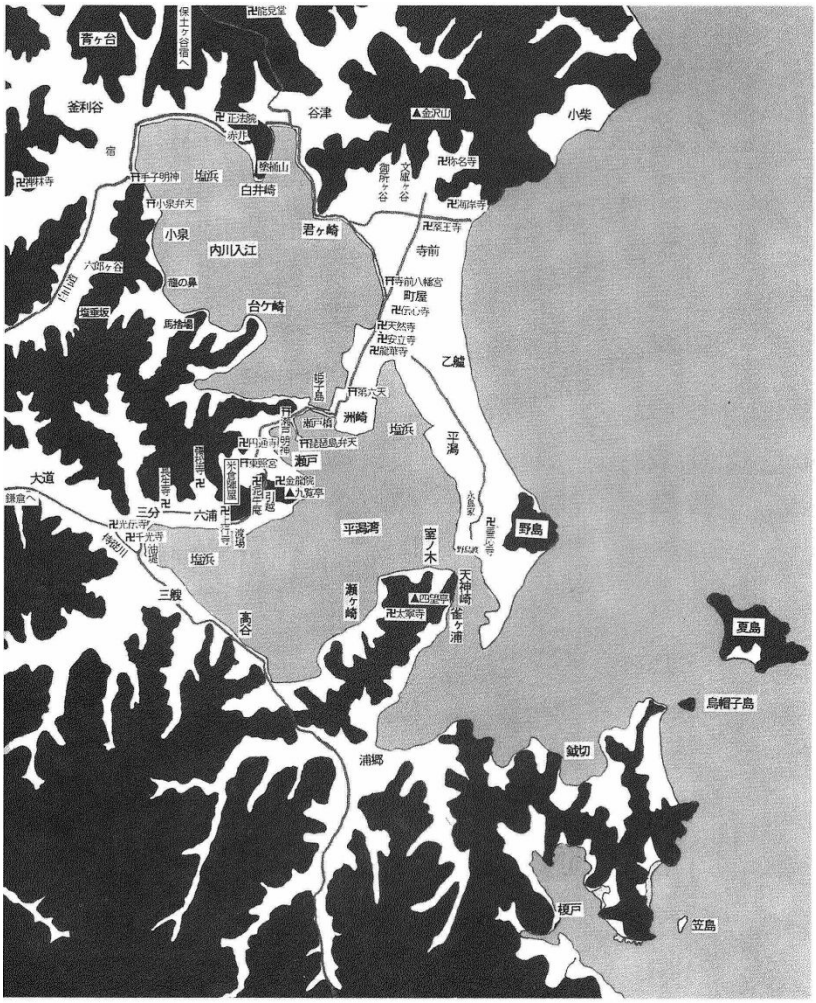
日本書記に武蔵国久良岐（むさしのくにくらき）は屯倉（みやけ）（収穫物を蓄える倉庫）となり、大和朝廷（ちょうてい）の直轄領（ちょっかつりょう）となったことが記されています。日本書記は神代から持統天皇（じとうてんのう）の時代までを扱い、今から約 1,250 年前に完成した日本最古の歴史書です。この久良岐郡（くらきぐん）（久良郡）は東京湾沿いの金沢区、磯子区、港南区大部分、中区の一部に及んだが広い地域でしたが、横浜市の市域拡張（しいきかくちょう）で次々に縮小し、金沢町・六浦荘村（むつうらそうそん）は、昭和十一年十月一日に横浜市に編入し磯子区の一部となりました。昭和二十一年五月に金沢区が磯子区から独立しました。

（２） 布久良から六浦へ

金沢が初めて書物に載ったのは約 1,100 年前「和名抄」の「鮐浦」（布久良）という地名です。鮐はふぐのことで、袋のように海の入り口が小さくて腹の大きい形の海を抱えた所を指します。

この辺りの地名は鮐浦から布久良へ、さらに六浦へと変化したと云われています。当時の金沢の中世の古地図が示すように、全く人の手が加わらない風光明媚な桃源郷であったと思われます。

野島と室ノ木の間は一町（100m）洲崎と瀬戸の間は十間（18m）で、瓢箪のような形をした二分された内海となっており、瀬は流れの早い急な所という意味から、瀬ケ崎や瀬戸の地名が付いたと思われます。



【中世の金沢の古地図】

（３） 巨勢金岡と筆捨て松

巨勢金岡は約 1,130 年前に宮中に仕えた宮廷画家の元祖ですが、その作品は現存していません。東国に親族がいたことから、その親族を訪ねる旅を重ねていたことが知られています。昔の旅人は、見通しが良く平坦な海岸線や山の尾根伝いの道を利用しました。古い道は自然にこうした場所に形成され、金沢も江戸方面に向う際に谷津から上がって、今の六国峠ハイキングコースを経て氷取沢、笹下、弘明寺、井土ヶ谷を通って保土ヶ谷へ抜け、東海道に通じていたようです。

巨勢金岡が東国への旅すがら、この道を通ったと考えられ険しい坂道を登り汗ばんで休息した場所が赤井谷の裏山「能見堂跡」であったと考えられます。ここからの眺めは小島が散在し岬が突出して、東京湾越しに房総半島も望むことができ、素晴らしい景色でした。金岡は、この風景を写生しようと試みましたが、全く筆舌につくせず霊妙な絶景に圧倒され、とうとう写生できず「松の根元に絵筆を捨てた」という伝説があります。この伝説が残る筆捨て松は、戦前まで能見堂跡にありましたが、太平洋戦争で油を取るために切り倒されてしまいました。寛永年間、この場所に芝の増上寺の子院とし擲筆地蔵尊「能見堂」が建立され名所絵図が売られたり、茶屋（三星亭）などが出て繁盛していたようです。（関連資料 P52 参照）

【筆捨て松】

（４） **富岡の地名**

富岡全域がたくさんの岡や谷で構成されている所から十三岡が「富岡」となったという説と、海・山の幸に恵まれる豊かな土地で、住民も素朴な平和な不自由のない所「富む岡」という説があります。

西暦 650 年ごろ、山口県のある長者の獲物に珍鳥の白い雉が入り、朝廷に献上したところ、時の孝徳天皇が大変喜ばれ年号を「白雉」と改元されたという話が残されています。この伝説に酷似した言い伝えが富岡地区にも残っているとのことです。この伝説にちなみ富岡の長者は喜んで、塚をつくり「鳥見塚」と名づけ、その周辺を鳥見ヶ丘と呼んだそうです。現在も「鳥見塚」というバス停や「鳥見ヶ丘団地」という名前が残っています。

（５） **大津波で海没した長浜千軒**

応長元年（1311 年）に、長浜にあった大きな漁村が大津波で一夜にして海没しました。福 竪海寺本尊の観音様が身代わりとなって海入、住民に溺死者はなかったと云われています。住民は小柴、富岡、州崎、氷取沢、更に千葉富津にも移住したそうです。昭和四十年（1965 年）に埋め立てに先立つ調査で、海底に埋没する巨木の根株が発見され、長浜千軒の存在が確認されました。現在の埋立地「並木」は、このことに由来するそうです。

また、小柴の寶蔵院には、この大津波で海中に流されて漂う村人達が、この寺の公孫樹の木の麓のかがり火を目安に辿りつき、この土地に住み着き、村の名前をお寺の山号の此の木山としたという伝承が残っています。此の木は小柴の地名の由来とも云われています。

3. 鎌倉時代の金沢

治承四年（1,180 年）、源頼朝が鎌倉に本拠を構え慌しい中、瀬戸の早瀬（瀬戸橋）近くに大山祇命を祭神とする三島明神を勧請して瀬戸神社を祀りました。頼朝は、金沢を鎌倉と一体の所と認識し、大変に重要視しました。金沢が歴史の舞台に登場するのは、寿永四年（1,185 年）源平の決戦（壇ノ浦）で源義経や源範頼が活躍し平家が滅亡して源頼朝が鎌倉に居を構え幕府が開かれてからのことです。

当時の金沢は平潟湾が奥深く入り込んで、今の塩場、川、六浦南町内は海で、瀬戸の小瀬戸（瀬戸橋）から奥も谷津の浅間神社下、釜利谷の手子神社下、小泉、大川、谷津の大部分や泥亀まで殆ど海でした。今でも手子神社の近くや洲崎には河岸という屋号の家があり、白井の鼻、君が崎、瀬ヶ崎のように「海に突き出た岬」の名残をとどめている地名も残っています。当時の金沢は、山紫水明の景勝地で鎌倉人士の奥庭的な位置づけであり、憩いの場所でありました。

このことは源範頼が瀬ヶ崎別荘に持仏堂（薬師寺）を建立し、安定二年（1,238 年）四代将軍藤原頼経が金沢の海を遊覧した事実が、金沢が鎌倉の奥庭で絶好の憩いの場所であったことを物語っています。また、金沢は単に鎌倉人士の憩いの場所であったばかりでなく、幕府にとって軍事的、経済的に欠くことのできない重要地でもあったのです。

当時、材木座海岸の和賀江に度々、防波堤工事を進めましたが何れも失敗しており、鎌倉の海が外洋で波が荒く船着場の設置が困難であったのに比べ、金沢の平潟湾は水深もあり、波も穏やかで船の航行には絶好の場所でした。

加えて金沢の海は、早くから三浦半島、江戸方面、房総半島と互いに指呼の間にあり、各地からの就航が頻繁で、利便のよい場所でもありました。鎌倉とは朝比奈峠の難所で隔てられており、距離的に近くて、塩の供給や海路による物資の輸送に必要な港を持つ金沢を、かねてから鎌倉幕府は手に入れたいという狙いがあったようです。

このように、稀有の良港を有する金沢は、古くから鎌倉との関係が深く、多くの歴史的な旧跡や神社仏閣が残っています。

（１） 瀬戸神社

治承四年（1,180 年）建立。当神社は疫病が流行したり、旱天が続いたり、鎌倉幕府で重大な事件が生じたときに、七瀬祓・四方祭という祈願祭を行った場所で、頼朝をはじめ鎌倉幕府が厚く尊崇する神社でした。（関連資料 P48 参照）

（２） 琵琶島弁才天

治承四年（1,180 年）建立。頼朝の御台所政子が瀬戸神社建立とほぼ同時期に同神社前の突出した場所に琵琶島・水神様の竹生島弁財天を勧進しました。政子は、金沢との結び付きを強化し頼朝を後方から支援しました。（関連資料 P48 参照）

（３） 富岡八幡社

建久二年（1,191 年）建立、源頼朝が富岡に蛭子命（恵比須・富岡八幡宮）を勧進し、瀬戸神社と併せて金沢の地と鎌倉の一体化を計り、幕府との結び付きを強化した証拠ではないではないかと思われます。（関連資料 P48 参照）

（４） 金沢四石

①福石･･･頼朝が瀬戸神社に百日祈願をしたという伝説があり、祈願に先立ち平潟湾に入り禊をした際、衣服を脱ぎ掛けた石「服石」が後に「福石」と呼ばれるようになったと云われています。この石の前面で物を拾うと親類縁者までが幸福になるという伝説があります。現在は、琵琶島弁財天の入口に祀られています。

②飛石･･･瀬戸金龍院本堂の横、九覧亭（昇天山）へ登る道側の大きな石上に三島明神の祠が祀ってあります。元は九覧亭の上にあって三島明神の御幣が飛んで来てこの石上に立ったことから「飛石」と云われています。また、石の姿が鳶に似ていることから「鳶石」とも呼ばれました。（関連資料 P56 参照）

③美女石、④姥石･･･北条実時が建立した称名寺（金沢文庫）境内に配置された石の中で、三代北条貞顕が特に日向より取り寄せた青島石です。称名寺客殿前の阿字ヶ池の汀にあり、この石には「姫君が姥に付き添われ池のほとりを散策中に誤って池に落ち、驚いた姥が池に飛び込み助けようとしたが力及ばず、姫と共に溺れ死に池の中で石に化して仲良く立っている」と言う伝説があります。現在は、池の上からは美女石だけしか見ることができません。

（５） 瀬戸神社で起きた仇討ち「放下僧」

放下僧は中世・近世の時代に現れた大道芸人（手品・曲芸）のことで、それに身をやつした兄弟が瀬戸神社で仇討を果たした事件が「放下僧」という謡曲になっています。

折しも源頼朝が征夷大将軍に任ぜられ、海神を祀った瀬戸神社が多くの船人や旅人の参詣で賑わっていた最中に起きました。社殿右側の蛇混柏、三本杉の根元で下野国郷士である牧野左エ門勝重の遺児次郎丸と小次郎兄弟が、父の仇敵である相模国住人である刀祢信俊を討って恨みを晴らしました。

この事件は、伊香保温泉湯治の折、たまたま居合わせた両人が争い事を起こし、刀祢信俊に従者が二人いた勢いで牧野勝重を故殺したことが因縁となりましたが、舞台も平凡で話題性に乏しく、牧野兄弟は本懐を達成したあとに郷里の下野国に戻り幸福な生涯を送りました。

これに対し、同時期に起きた「曽我兄弟仇討ち事件」は、富士の裾野で大巻狩時に源頼朝の陣営近くで華々しく仇討ちを敢行し、天下騒動のうえ曽我兄弟の末期が壮烈であったため、世間の同情を買って有名となり、室町時代の謡曲、江戸時代に歌舞伎、浄瑠璃、日本舞踊などの作品となっています。

（６） 源 範 頼 と太寧寺、薬王寺

昭和十八年五月に瀬ヶ崎（関東学院女子短期大学辺り）室ノ木村の一帯は追浜飛行場拡張のため移転を強いられました。大寧寺も軍命により現在の片吹町へ強制移転させられました。現在の太寧寺は小さなお寺ですが、鎌倉建長寺派の禅寺で、本尊は念持仏薬師如来（通称へそ薬師）で、運慶作と云われています。本堂の左横に源範頼の墓があります。

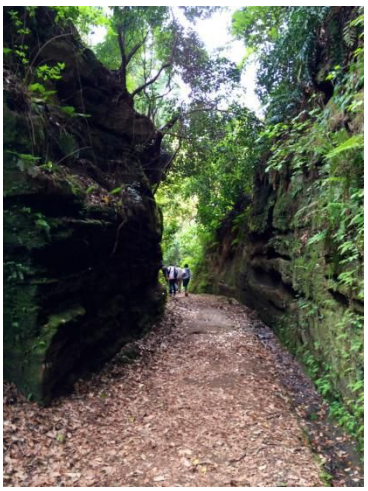
昔の瀬ヶ崎は平潟湾に面し、風光明媚な場所で（平潟の落雁、野島の夕照、内川暮雪、瀬戸の秋月）この地に源範頼が別荘を設け邸内に持仏堂を建てました。これが真言宗薬師寺（現在の薬王寺）で、範頼の位牌が同寺に安置され毎年八月二十四日「三河忌の法要」が行われています。

位牌には、建久四年八月二十四日「太寧寺殿道悟大禅定門尊儀」と記されています。範頼は義朝の第六男で実母は遠江国の遊女。兄頼朝、弟義経とは異母兄弟。遠江国蒲御厨で生まれ育ったため、当地では蒲生御曹司とか蒲の冠者と呼称され、義経と壇ノ浦で平家一門を討伐し、義経は京都に留まりましたが、範頼は鎌倉に帰り兄の頼朝を助け幕政の重責を担いました。

源頼朝が征夷大将軍となり、祝賀を兼ね富士の裾野へ大巻狩に出ている最中、陣の近くに居た工藤祐経を討つ「曽我兄弟仇討ち事件」があり、この報の噂が噂を呼び鎌倉へ「頼朝が討たれる」という誤報となって届きました。悲嘆にくれる御台所政子の傍にいた範頼が慰めの言葉として「私が遺児後見役として源家を守る」と伝えます。無事鎌倉に帰った頼朝は、この言葉を曲解して「乗っ取りの野心あり」と受け取り、範頼を伊豆修善寺へ配流し、追い打ちをかけるように建久四年八月十七日に梶原景時、景季父子が修善寺を急襲しました。範頼は信工院（坊）へ火を放ち自害しました。

また、異説として急襲され信工院に火を放った後に横須賀の追浜に逃れ、鉈切に隠れて、薬師堂に入り自害したと言う説があります。追浜、鉈切の地名の由来や範頼が平潟湾で舟を渡した者に「蒲姓」を授けたという言い伝えがあります。現在も平潟、州崎、横須賀の浦郷に、蒲、蒲谷姓が見られます。

（７） 朝比奈峠と大道



朝夷奈切通しは仁治二年（1,241 年）執権北条泰時が十年の歳月を掛けて人海戦術で完工させました。鎌倉の出入口の七切通しの一つで、唯一、往時の姿を残す切通しとして、国の史跡指定を受けています。鎌倉との交通路の確保が重要視されたのは当然ですが、泰時自身も軍事的、経済的に金沢の重要性を強く感じていたことが分かります。

当時、朝比奈峠は険阻な山道で、峠越えが極めて困難であっ

たことから、この峠道の改修が急務であり、朝比奈三郎義秀が一夜にして切通しを作ったという伝説があります。実際は、重機がない時代に、大きな岩山を切下げて切通しを一夜で造ることは困難です。朝比奈三郎が安房国朝夷郡に住んでいたことや、度々この峠を往復していた一族郎党が朝比奈姓を名乗っていたことから、朝夷奈切通しや朝比奈峠と名付けられたと云われています。

＜和田義盛＞三浦一族杉本太郎吉宗の子、久安三年（1147 年）生まれ。三浦半島の三浦郡和田の里（現・三浦市初声町和田）に本拠を構えました。源頼朝に従い幕府の創設に貢献、初代侍所別当の要職に就きました。頼朝死後、北条義時に反目し一族で戦いましたが敗死しました。安房国和田御厨に所領があったことから和田を名乗り、六浦とも縁が深く、大道に和田の谷、瀬ヶ崎に和田山、和田峠の地名が残っています。朝比奈峠一夜伝説の朝比奈三郎義秀は和田義盛の三男です。

（８） 鼻欠地蔵

朝比奈峠が改修されると、六浦の津から鎌倉へ通じる道は従前よりその重要性が増し、改修が繰り返され道幅も三メートル程広い道となりました。当時としては立派な道であった所から「大道」という地名になったと云われています。県道原宿六浦線の大道中学校の入口右側の崖に大分風化した大きな磨崖物「鼻欠地蔵」があります。当時から鼻が欠けていたことや、朝比奈が相模国、大道が武蔵国で国境の尖端（はなかけ）にあったことから名付けられたと云われています。（関連資料 P59 参照）

【風化した鼻欠地蔵】

（９） 渡し場

国道 16 号線と環状 4 号線が交わる所に六浦橋のバス停があります。この一帯は、鎌倉時代から「渡し場」と呼ばれ、平潟湾の船着場、六浦湊として大変栄えた所でした。鎌倉と房総を結ぶ要所で、廻船問屋や年貢米を両替する為替業者などで賑わう港町でした。

（１０） 塩嘗地蔵と熊野神社

鎌倉幕府内の人口増加につれて、塩の重要性が増し金沢の遠浅の海で作られた塩が鎌倉に供給されました。塩を背負ったり担いだりした塩商人が、峠越しの茶屋で汗を拭き、一休みした際、道端の地蔵様に一握りの塩を初穂として供えていました。商売が終わる夕刻に「朝供えた塩が無くなる」のでお地蔵様が嘗めたと信じ、その名が付いたと云われています。現在は鎌倉十二所の光触寺境内に移転されています。

【塩嘗地蔵】

朝比奈峠の改修工事は完成まで長期間を費やしたことから、北条泰時が工事の無事完工を祈願し熊野神社を勧請し、現在は朝比奈町の鎮守様とて崇敬されています。

（１１） 金沢の地名の由来

正嘉二年（1,258 年）北条実時が金沢別邸内の持仏堂で灌頂の儀式をして、仏弟子（釈迦の弟子・仏教の信者）になった時、武蔵国倉城郡六連庄内（久良岐郡六浦庄）金沢村とあり、この時点で「金沢」の地名が使われたものと考えられます。六浦庄は現在の金沢区を指し、その庄内に金沢村があったようです。全国各地に金沢の地名がありますが、多くが砂鉄や砂金の産地「金洗沢」が地名の語源になっています。

頼朝が鎌倉幕府を開き各地から武士が集まり、後を追うように鍛冶職人が綺麗な清水が湧出する山裾や谷に移り住みました。金沢の鍛冶職人は主に釜利谷、谷津の染井谷に住み、武具や馬具等の製作に携わりました。金に関する話としては、称名寺の裏山（ぼうず山）の梅林の中にある幾つかの塚に小金や朱が埋蔵されているという伝説と、これに纏わる「古歌」が残されています。

「朝日さす　夕日かがやくその下に　小金千ばい　朱千ばい」

（１２） 北条定顕が造営した瀬戸橋

平潟湾は江戸時代から次第に埋め立てられてきましたが、昔の金沢は「鮨浦」とか「布久良」と呼ばれていて、鮨・風呂敷包のように入口が小さく中が大きく広がった所で、後に「六浦」となりました。昔の平潟湾は、野島と室ノ木が百メートルの海峡でつながり、内川、塩場、瀬ヶ崎、瀬戸、高谷、三艘、川、六浦、現在の柳町の全部が平潟湾内でした。

【左上が瀬戸橋】

また、瀬戸と洲崎の間は僅か十八メートルの極めて狭い海峡で、泥亀、小泉、赤井宿谷津の一部が広々とした内海で、潮の満干の際には激しい急流となりました。この場所を渡ることが困難であったため、称名寺方面へ行くのに、朝比奈峠から鼻欠地蔵を経て、現在の高舟台を越え、白山道を経て釜利谷、谷津方面へ迂回していました。これに不便を感じた金沢北条三代定顕が、嘉元三年（1,305 年）に六浦、釜利谷、金沢、富岡等の住民に瀬戸橋造営棟割銭（戸数割銭）を課し、瀬戸橋が造営されました。橋は海峡が急流であったため中央に中島を造り、岸を二つの橋で結ぶ眼鏡橋でした。

（１３） 釜利谷と鍛冶匠

かつて、釜利谷は武蔵野国六浦庄冨田郷と称し、文字も蒲里谷又は釜里谷等と書いていました。鎌倉幕府が開かれ、武家政治の中心地となると参勤のため鎌倉に足を留める武士が増え、武具の需要増から近隣地の金沢で水質の良い場所を求め、鍛冶匠が住むようになりました。

金沢は温暖で、海を抱えて原材料の砂鉄を運搬、入手するのに都合が良く、山裾の谷から良質の清水が湧き出て、これを利用して刀剣、甲冑馬具などを作ったものと思われます。このことを裏付ける「金糞」が、金沢区内の鍛冶匠の仕事場遺跡から事実確認されています。

①白山道東光寺前清流　②手子神社前の清流　③北谷の氷取沢へ抜ける山間の清流

（１４） 金沢北条四代と金沢文庫と称名寺

金沢が鎌倉文化の中心として、最もその名を馳せたのは、正嘉二年（1,258 年）北条実時が金沢山山裾の別荘内に持仏堂を建立し、後の文永四年（1,267 年）下野国より審海僧侶を迎え、称名寺を建立しました。

この後、建治元年（1,275 年）に金沢文庫を建立（七百四十年前）。学者、学僧、武士、文人など多くの人が称名寺（文庫）を訪れ、金沢学校とも呼ばれました。これ以降も多くの識者がここを訪れ、金沢文庫で学ぶようになりました。学問に熱心な実時は多くの書物の伝授を受け一層学問に励み、晩年病を得て職を退いてからも当地に別荘を建て、持仏堂に弥陀三尊（阿弥陀如来、観世音菩薩、勢至菩薩）を祀り、金沢文庫も共に充実し繁栄しました。（後に入道となり、称名寺殿とも呼ばれました）

❖ 金沢北条四代･･･北条実泰（金沢北条の始祖 1,208～1,263 ・鎌倉幕府三代執権泰時の弟）
①実時（初代 1,224～1,276）②顕時（二代 1,248～1,301）③貞顕（三代 1,278～1,333）
④貞将（四代 1,302～1,333）

❖ 金沢文庫･･･建治元年（1,275 年）に実時により創建された以降も、北条四代により管理され、日蓮上人・吉田兼好など多くの僧侶、文人がこの地に集まりました。その後、北条氏が滅亡し、文庫は称名寺へ管理を移されましたが、同寺も次第に衰退し、重要な蔵書、文献などが散逸しました。明治になり伊藤博文らの尽力で復興され、旧蔵書の回収が進められました。

❖ 称名寺･･･実時が自分の別荘地に氏寺とし建立、真言宗奈良西大寺派に属します。文永四年（1,267 年）下野国から審海僧侶を迎え真言律宗に改め開山しました。北条四代に亘り同寺を保護、多くの寺領が寄付され殊に三代貞顕が七堂伽藍を完成し園地も拡張整備、この時代には鎌倉における大寺院の一つとして繁栄しました。

現存しているものは、金堂（本堂、1,615 再建、弥勒菩薩が本尊）、光明院（正和五年 1,316 年建立、室町時代風様式の門が最古）、仁王門（文政元年 1,818 年再建、仁王像は元享三年 1,323 年運慶派の作）、赤門（1,772 年再建、別称総門）、新宮と太宝院の一部、鐘楼（称名の晩鐘、文永6 年 1,269 年、国光・依光父子作）です。阿字が池（別称心字が池、元享三年 1,323 年性一法師・二階堂忠貞の作）一の室、薬師堂、海岸寺、三重塔（1,882 年に焼失）は現存していません。

（１５） 三艘、象ヶ谷、金沢猫

実時の時代（1,260 年頃）に、唐船三艘が六浦の津に着岸、その唐船に一切経、青磁の花瓶や香炉、蜀光錦等が陸揚げされました。これらは称名寺の宝物として、現在も金沢文庫に収蔵されています。

「唐船に積まれた象が三艘に着いた時には息絶えていた。その象を弔うために象塚を建てた」という話に纏わる地名が三艘の象ヶ谷として残されています。また、唐船が珍しい家猫（唐猫）を置いていき、家や船などの鼠除けに非常に珍重され繁殖したものが金沢猫（尾長・金目銀目）と呼ばれました。（関連資料 P43、58 参照）

【千光寺の猫塚】

（１６） 三艘の文殊堂

六浦一丁目にある三艘町内会館の一角にある文殊堂です。昭和四年（1929 年）に京急の逗子線の線路敷設で三艘の町内会館に移設され、現在もそのままの状態で祀られています。本尊は文殊菩薩坐像（像の高さ５４ｃｍ）で室町時代後期の作です。古い記録によると、この文殊菩薩は朝倉景隆（小田原北条の家臣）の守護仏で、浦郷（横須賀市追浜）の良心寺の本尊でしたが、後に平分三艘へ移転されました。

【町内会館の文殊菩薩】

（１７） 兼好法師（吉田兼好）と金沢

鎌倉末期から室町時代にかけての歌人。弘安六年（1283 年）生まれ。当初、掘川家の家司となり、後に二条天皇に仕えましたが、天皇の皇位争いに嫌気をさして世の無常を感じて出家しました。晩年は、随筆「徒然草」を完成させます。兄の兼雄が北条二代顕時、三代貞顕の執事として仕え、千葉泰胤の娘で北条二代顕時夫人の発願にて建立された嶺松寺が上行寺の近くの殿谷戸にあったことから、旧居跡が上行寺の裏山の一画にあったと云われています。称名寺、金沢文庫にも何度か訪れており、古文書によると「武蔵野国金沢というところに、昔住みし家の、いたうあれたるにとまりて月、あかき夜／故郷の浅茅の庭の梅雨の上に床は草葉とやどる月かな」と詠んでおり、金沢をこよなく愛した歌人であります。

（１８） 日蓮上人と金沢

日蓮上人（1222 年-1282 年）は安房清澄山で修行、十八才で比叡山延暦寺をはじめ、京都、奈良の寺を尋ね修行し日蓮宗を開宗しましたが、度々鎌倉へも来ています。その折に六浦の津を利用して称名寺に何度か立ち寄り、経文や文献の宝庫である金沢文庫を訪れて修行されています。

（１９） 船中問答

下総船橋の郷士、富木播磨守五郎胤継（1216 年-1299 年）が鎌倉へ参勤の途次、たまたま日蓮上人と同船しました。旅の僧が「近頃安房の国に日蓮という僧がいると聞くが、御坊はご存知か」と尋ねると、「私が日蓮です」と名乗ったことから、胤継と日蓮上人は、六浦の津に到着するまで法論を戦わせることになりました。議論が尽きず、とうとう胤継の祈願所であった六浦の金勝寺（真言宗・後の上行寺）に逗留し問答を続け、この法論ですっかり日蓮上人に帰依して金勝寺も日蓮宗に改宗しました。胤継は、後に出家し日常上人と称し法華寺を開山しました。法華寺（現・法華経寺）は、身延山久遠寺、池上本門寺、富士大石寺と共に日蓮宗の四大本山の一つです。

（２０） 荒井妙法と仁王尊

六浦で廻船問屋で財を成した郷士、荒井平次郎光善（1261 年-1353 年）は、日蓮宗に帰依し、身延山や中山の法華寺に多く寄進、同寺より妙法を授かり日荷上人となりました。その後、杉田妙法寺を開山、この寺に移り住み日蓮宗に改宗しました。妙法は瀬戸金龍院附近に屋敷があり、この井戸は、金沢七井戸の一つの「荒井」です。

また「日荷上人が囲碁に勝って称名寺の仁王尊を三日三晩背負って身延山へ運んで納めた」という伝説があり、神通力健脚の神として脚気の守神と奉られ、現在も身延山の七面山に参詣する人がいます。（仁王尊は金勝寺のものという説もあります）

上行寺の境内に樹齢 700 年の巨木「榧」がありますが、日荷上人が身延山から持ち帰ったとの謂れがあります。（榧は囲碁の版木として使われています）

晩年、妙法は荒廃していた瀬戸橋の架け替え費を全額負担したことでも知られています。

4. 足利持氏と金沢

（１） 大道の関所

1,333 年、北条氏が滅亡すると共に金沢北条も滅亡の一途を辿りました。後継者を失い存続

が困難に陥った称名寺・金沢文庫は荒廃するばかりでしたが、第四代関東管領の足利持氏はこのことを惜しみ、永享二年（1,436 年）から三年間、大道に関所を設け、称名寺子院の常福寺に管理させて人馬の通行料金「関銭」を徴収しました。通常の関所とは異質で、人別調べは実施せず、あくまで称名寺・金沢文庫の造営費を捻出するための関所でした。

（２） 引越の切通し

六浦上行寺東の丘（上行寺東遺跡）から泥牛庵にかけての丘陵地の地名で、中世後半に瀬戸から六浦に抜ける道ができました。この切通しが急坂であったことから「引越の切通し」と呼称されていました。永享十年（1438 年）永享の乱の際、海老名尾張入道らは、幕府、管領方の長尾忠政らに攻められ、金沢合戦で足利持氏方の一色直兼らと共に戦に破れ、この坂（引越）附近で自害したといわれています。（泥牛庵に海老名尾張入道兄弟の宝篋印塔があります）

＜永享の乱＞鎌倉公方足利持氏が将軍義教により討伐された乱。持氏が将軍職を望み、室町幕府に反逆、これを諫める関東管領上杉憲実とも対立し、戦いは一時関東全域に及びましたが、持氏は利を失い同年 11 月に金沢文庫称名寺に入り剃髪し降服、後に鎌倉永安寺に護送、攻められ自害しました。この間に持氏方の上杉憲直、一色直兼と幕府方長尾忠政らと衝突で、金沢一帯（寺前、町屋辺り）は凄惨な戦場となりました。

（３） 太田道灌と山吹の里

道灌は、永享四年（1432 年）鎌倉に生まれました。若き日、金沢の山に鷹狩に遊び、途中俄雨にあい、六浦のとある農家で蓑（雨具）を借りようとしたところ、少女が無言で「山吹の花一枝」を差し出しました。道灌はこのことに意を解せず、事の始終を家臣に告げると、それは「七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞ悲しき」という古歌に寄せて「蓑一つさえ持っていないと暗に断りを告げた」ことを教えられました。それ以来、自身の無学を恥じ、益々学問に励んだという逸話があります。

（４） 小栗判官と照手姫

金沢には、六百年以上前の照手姫の伝説が残っています。照手姫は京都御所の北面武士（警護の武士）の娘でしたが、訳あって妓女となり藤沢の盗賊の首領、横山太郎の屋敷に居合わせました。関東管領の足利持氏に謀反の嫌疑をかけられた小栗判官の横山による殺害計画を事前に知り、これを判官に伝えました。照手姫から知らされた判官は、宴席で勧められた毒入り酒を一口

だけ飲み、息が途絶えたよう振るまいました。横山太郎は判官主従全員が死んだものと思い、藤沢遊行寺の裏山に捨て置きました。遊行寺の僧に観世音から「判官主従を救え」というお告げがあり、弟子たちを使わせてみると、従者は全員息絶えていましたが、ただ一人温もりのあった小栗判官だけが助け出され、一命をとりとめました。

一方の照手姫は、追われる身となり六浦まで逃げ延びましたが追っ手に捕らえられ、川（字名）の千光寺の前の「油堤」という所から川の中へ投げ込まれました。姫は日頃から深く信仰していた観音経を一心に唱えたところ、奇跡的に野島の漁師に助けられましたが、あまりにも美しい姫を見た漁師の妻が嫉妬して、姫小島の青松葉で燻し殺されかけました。ここでも観音経を一心に念じ、無事難を逃れましたが美濃国の遊女に売られてしまいました。現在の千光寺の本尊像は、照手姫の念持仏千手観音像です。燻し松は、現在は埋め立てられ消滅していますが、瀬戸橋北側の姫小島にあった松のようです。

その後、判官の病も癒え、藤沢の遊行寺で横山太郎を討ち、本復、謀反取りの疑いも晴れ、ようやく美濃国で照手姫を探しあてました。念願かなって照手姫を妻に迎え、幸せに暮らしたという伝説です。

照手姫の乳母侍従が姫を訪ねたおり、行方知らずを悲しみ、姫の化粧道具を堤に残し光傳寺前の川に身を投げたことから、この川が侍従川と呼ばれるようになりました。（相模風土記稿）

5. 江戸時代の金沢

鎌倉開幕とともに脚光をあび、経済、文化、観光等ともに繁栄した時代は北条氏の滅亡で終焉となり、称名寺や金沢文庫も衰微荒廃の一途を辿ります。再び脚光を浴びたのは家康が江戸幕府を開き、江戸が政治・文化の中心となった頃で、金沢は天領となりました。当時は、称名寺百石、瀬戸神社百石、龍華寺五石の石高でした。江戸市民の生活が豊かとなり東海道を上り下りする旅人も増え、巨勢金岡（関連資料Ｐ11参照）や江戸っ子の往来で再び第二期観光時代が到来し、美しい海岸が残る金沢八景や金沢七井、金沢四石、金沢八名木等が改めて知られることになります。

（１） 金沢八景

今から三百八十年前に、支那（中国）の瀟湘八景をになぞらえて近江八景が選ばれると、大名や旗本が知行地に夫々八景を作り、能見堂を中心にした金沢八景は、元禄七年（1,694年）に心越禅師の漢詩によって有名になりました。

当初の金沢八景は現在の八景とは場所が若干違っていました。

＊当初の金沢八景…

①小泉（瀟湘夜雨）
②寺前、柴の辺（洞庭秋月）
③野島、瀬戸（漁村夕照）
④野島、瀬ヶ崎（江天暮雪）
⑤峠・朝比奈（山市晴嵐）
⑥平潟（平沙落雁）
⑦室ノ木（遠浦帰帆）
⑧称名寺（遠寺晩鐘）（カッコ内は支那の瀟湘八景です。）

＊現在の金沢八景･･･

①小泉の夜雨（※）かぢ枕とまる雨も袖かけて涙ふる江のむかしをそ思ふ
②瀬戸の秋月　　よる浪の瀬戸の秋風小夜ふけて千里の沖にすめる月影
③野島の夕照　　夕日さす野島の浦にほす網のならふ里のあまの家々
④内川の暮雪　　木陰るゝ松にむもれてくるゝともいさしら雪のみなと江の空
⑤洲崎の晴嵐　　賑へるすさきの里の朝けふり晴る嵐にたてる市人
⑥平潟の落雁（※）跡とむる真砂に文字の數をへて鹽干潟に落るかりがね
⑦乙舳の帰帆　　沖つ船ほのかに見しもとる梶のおともの浦にかへる夕波
⑧称名の晩鐘（※）はるけしき山の名におふかぬ澤の霧よるもるゝ入相の聲
（現在の金沢八景の内（※）印は瀟湘八景になぞらえた当初の八景と違いのないもの）

＊金沢八景は、元禄の頃、心越禅師の漢詩や京極兵庫高門の和歌に詠まれています。金沢八景詩歌巻一軸は、元は能見堂に所蔵されていましたが現在は喪失しています。

（２） 金沢八銘木

繁栄で多くの人々を集めた鎌倉時代に、称名寺と瀬戸神社に銘木が存在しました。現在はその多くが枯死してしまい、名を残すのみになっています。

① 青葉の楓（称名寺）…阿字が池の池畔にあり、冬でも紅葉しない楓として伝えられていました。何代かの樹木も枯れ、二代目の切り株が客殿の玄関内に置かれています。謡曲「六浦」（室町時代観阿弥の原作）に物語られています。

② 西湖の梅（称名寺）…北条実時が中国から取り寄せた八重咲の黄色味かかる種ですが、今は、存在しません。

③ 黒梅（称名寺）…紅梅の濃い種と思われます。今は存在しません。

④ 桜梅（称名寺）…八重咲の桜のような艶麗な花をつけました。今は存在しません。

⑤ 文殊桜（称名寺）…左近の桜になぞらえ階前の金堂の左に植えられていました。花が獅子の頭に似ていました。今は存在しません。

⑥ 普賢象桜（称名寺）…右近の橘になぞられ階前の金堂の右に植えられていました。桜の芯が象の鼻に似ていました。今は存在しません。

⑦ 蛇混柏（瀬戸神社）…拝殿の右前方に植えられていましたが、1,680 年の大暴風で倒れ、現在の社殿に使用されています。幹が白く大蛇が大空に昇るような様で大変な巨木でした。枯れた幹が横たわっています。

⑧ 三本杉（瀬戸神社）…一つの株から太い幹が三本立っていました。根元で放下僧の仇討ちがありました。1,680 年の大風で倒れました。（関連資料 P15 参照）

【境内に横たわる枯れた蛇混柏の幹】

※ 雀が浦の一つ松（室の木）…金沢八銘木には入っていませんが、雀が浦の巨岩の上の一本松は、沖を行き交う船人の目印になっていました。別に一葉松とも呼ばれていました。

（３） 金沢七井

① 御井戸…称名寺赤門近くに小さな井戸があります。寺前の神明森に大神宮が祀られ、御水をこの井戸の冷泉を汲んでいました。

② 亀井…称名寺西側の秋本家の裏庭に石積井戸があります。良質で豊富に湧出して、亀山天皇の勅旨が称名寺に下向された際、御用に立ったとの伝説があります。

③ 染の井…国道 16 号を左に入り、能見台団地の下に手押しポンプのある井戸があります。泉水が沸いたことで、水質が悪い谷津全町で炊事用とし多くの人が利用しました。谷の奥に関ヶ谷不動が祀られこの近くに刀鍛冶が住んだ形跡がありました。

【現存する亀井】

④ 荒井…瀬戸金龍院の近くに荒井家の屋敷があり、この邸内にある井戸です。井戸底に妙法と刻んだことから、荒井妙法にちなんで、この呼称となりました。

⑤ 赤井…バス停「赤井」の近くに正法院という寺があります。村人が病気や日照りに苦しむので井戸を掘り、加持（災いを除き、願いを叶えるため仏の加護を祈ること）をしたところ、鉄分を含む煤水・赤茶の水が沸き出ました。この水の色が村名に由来しています。近隣の共同浴場施設に井戸を掘削して鉱泉浴場としたのが赤井温泉です。

⑥ 小中井…昔の寺院境内（現在なし）にありました。日々本尊様に供える閼か水を汲んだ井戸で、当時、御閼か井と呼ばれましたが、後に御中井となり、現在の小中井となったと考えられます。

⑦ 白井…金沢文庫近く谷津浅間神社から伸びる小山（昔、海に突き出た岬）があり、この裾の乳白色の湧水がでる井戸が白井です。ラジウム鉱泉の旅館がありました。

（４） 慶珊寺と豊島刑部明重

富岡地先海岸の埋立て前は、山門脇まで海で、極めて風向絶佳で閑静な場所でした。寺は寛永元年（1,624 年）豊島刑部明重が富岡郷 1,700 石を加増され、目付役に任ぜられた。これを機に父母の供養のため建立、父親の法名「花翁常蓮大居士」から山号を花翁山とし、母の法名「瑚琳慶珊大姉」から寺号を慶珊寺（真言宗御室派）としました。

豊島家は桓武平氏の出で、畠山重忠と同属で、徳川三代（家康･秀忠･家光）旗本とし仕え、寛永五年（1,628 年）西の丸殿中で、時の老中・中井正就に対し、刃傷に及び切り伏せました。（長子継重は切腹、豊島家は家名断絶、家禄没収となりました。）この際に中井は背後から青木忠精に抱き止められましたが、青木まで田楽刺しで共に絶命しました。明重は老中・中井の権勢欲と春日局による兎角政治を恐れ、世に警鐘を鳴らす正義の刃傷事件でした。（関連資料 P40 参照）

江戸城三大刃傷事件は、①1,628 年豊島明重刃傷事件　②1,684 年の稲葉石見守が大老堀田正敏刃傷事件、③1,701 年浅野内匠頭が吉良上野介刃傷事件であります。

（５） **野島百軒と塩風呂**

太古の野島は平潟湾の前面に浮かぶ島で、美しい景観と温暖な気候で山海の幸にも恵まれ、猛獣や外敵に襲われることもなく、七千年以上昔から古代人が暮らしを営んでおりました。

凡そ、四千年前は町屋から乙舳海岸に砂洲が延び陸続きで、江戸時代は洲崎村に属し、殆ど独立した内湾漁業に携わる人が住み、素朴な生活が営まれていました。江戸時代には、代々将軍家に鯛を献上する漁師もいました。野島には「野島百軒」と呼ばれる「戸数が百軒を越えると災害が起きる」という言い伝えがあり、住人は長年に亘りこれを守ってきました。

また、野島山の南麓の稲荷神社が祀られた辺りに、紀州藩主徳川頼宣（家康の十番目の子、紀州家の元祖）が治療のため海水を引き「塩風呂」をたてたという伝説があります。

（６） **咳神様**

国道 16 号のバス停東富岡の近くの小高い丘に「法橋様」と呼ばれた祠があり、百日咳や風邪が快癒するといわれ、多くの住人が信仰する「咳神様」が祀られています。全快した御礼に竹筒に甘酒を入れ、咳神様へあげる風習があり、住民による信仰心が守られてきました。

（７） **榎地蔵**

州崎から乙舳海岸に至る途中、野島橋へ通ずる道路との交差点の大きな榎の根元の小さな祠に地蔵尊が祀られています。水戸藩主徳川斉昭が金沢来遊の折、家来が霊験あらたかな地蔵尊であると報告すると、剛毅な性格の烈公（斉昭の別称）は人心を惑わしてはならないと海に投げ込んでしまいました。この地蔵尊が、はるばる海を渡り斉昭の領地の常陸の海岸に流れ着いたという謂れがあります。東京湾を経て鹿島灘の海岸に流れ着くという伝説ならではの話です。

（８） **まわり地蔵**

州崎の龍華寺山門の右側の州崎神社社殿の裏に地蔵堂があります。この地蔵は江戸の初期（1,524 年）に村人の浄財で造られた仏様で、高さ七十六ｃｍの寄木造りの坐像で、祭壇正面に祀られています。また、祭壇左側の厨子に安置された十七ｃｍの小さな立像が祀られていますが、この小さな地蔵さまが「まわり地蔵」です。

子育てや子授かりにご利益があり、「まわり地蔵」は、かつては厨子に入れられ、三日ごとに村の家々を回って、お花や供物（ご飯･お茶･水など）をあげて篤く祀られた風習がありました。伝説では、村人が洲崎海岸の海草取りの時に波に、打ち寄せられた地蔵様を見つけて私宅に持ち帰り大切にお祀りしたことが始まりであるとのことです。

（９） 入定塚

以前の乙舳海岸は砂浜が広く、少し高くなった砂丘に枝ぶりの良い松並木があり、この根元に入定塚がありました。現在は金沢小前の道路が海岸に至る左側にあり、一番大きな石仏が入定塚です。入定とは、心を集中して無我の境地に入ること、聖者や僧呂等が入滅することを言います。伝海上人は、村人への教化に努め、人々から大変尊敬されていました。

むかし、小柴と野島は海岸線の細い道で結ばれていましたが、大波が寄せるたびに海道が壊されて、村人たちは困っておりました。また、町屋、寺前などに疫病が蔓延し、多くの村人を苦しめていました。

伝海上人は、この様な惨状を嘆き、村人を法力により救おうと、地中深く四尺四方の穴を掘り、自ら樽の中に入り息をするための竹筒を地上まで伸ばし穴を埋めさせました。「地中から鐘の音や念仏が聞こえる間は一心に祈り、それが絶えたら死んだと思ってくれ」と言い残し地中の人となりました。それから地中で祈祷していましたが、念仏の声は次第に小さくなり、鐘の音も途絶え、とうとう七日目に悲しい朝を迎えました。上人の捨て身の功徳により、波による海道の侵食や村人を苦しめた疫病は治まり、伝海上人の徳に感激した地元の村人が入定塚を祀って弔いました。この信仰は今でも村人に受け継がれています。

（１０） 泥亀新田と牡丹園、大橋別荘

約三百五十年前の寛文八年（1,668 年）に平潟湾に塩田二町歩、走川（君ヶ崎と町屋の間）水田十五石を完成させた永島段右衛門祐伯の功績を称え、雅号「泥亀」をとって泥亀新田と命名しました。父道仙は江戸幕府の御典医で、子の祐伯は官を辞してから野島に住み、干拓事業に取り組み、度々の災害（関東大震災・集中豪雨・津波２回）と苦難を乗り越え、実に「九代･二百年の歳月を費やし完成」させた大事業でした。

広大な邸内に牡丹園があり、美しく優雅に咲く開花時には大変賑わったと云われています。始まりは徳川幕府元老酒井候から贈られたといわれています。

その後を引き継いだ大橋新太郎家（貴族院議員）の別荘には、牡丹園・サボテン園があり、共に有名となりました。大橋新太郎氏は、小説の金色夜叉のモデルになった人物です。

（１１） 横浜唯一の大名米倉様

金沢八景駅を右折し旧道を百メートル程行き、京急線のガードを潜ると三方崖地の住宅街があります。ここは徳川時代横浜唯一の大名米倉氏の六浦藩陣屋跡です。同氏の領分は一万二千石で、金沢の他秦野市、町田市、栃木市（栃木県）熊谷市（埼玉県）、安中市（群馬県）に分散していました。

米倉氏の始祖は清和源氏で武田氏の家臣でしたが、後に密かに徳川氏の勢力拡大に画策し、初代米倉種継が関が原・大坂冬夏の陣（1,615 年）で戦功を立て、甲斐国武蔵国で知行を賜り、米倉氏最初の譜代大名昌尹から何代か後、地縁血縁の老中柳沢吉保の六男保教（後の忠仰）が同氏と養子縁組となり、当主昌尹の時に下野国皆川から武蔵国久良岐郡金沢村瀬戸に移りました。享保七年（1,722 年）、三方嶮しい崖地前面平潟湾で要害の地に陣屋（お屋敷と呼ばれる）を構えました。この後、十六代昌言が子爵を賜り華族に列し、明治四十二年に死去するまで当地で米倉氏は続きました。

（１２） 江戸城金沢の間の障壁画

江戸城本丸御殿金沢の間の障壁画に、金沢の風景が描かれていました。徳川家康が金沢の風景を賞賛したことから、狩野光信（1565～1608 年）が能見堂からの眺望を慶長十一年（1606 年）頃に描いた美しい風景画です。この絵については、三浦浄心の著「巡礼物語」に紹介されています。この他にも二の丸・西の丸御殿にも、金沢の風景画が狩野派奥絵師により描かれていました。全ては現存しませんが下絵は保存されています。

（１３） 権現山と東照宮

京急金沢八景駅の西側にある山が権現山です。万治元年（1658 年）円通寺境内に当地代官八木次郎衛門により東照宮が建立され、別当寺として日輪山観音院円通寺を開山しました。当時、江戸から将軍代参の大名などが増加、それらの人々の休息・宿泊場所として当寺客殿が利用されました。この権現山の樹叢はお伊勢山と共に市内天然記念物に指定されています。

また、金沢園北側の小柴の小高い山も権現山と呼ばれています。東側海岸（元は海）に面する丘に熊野神社が祀られています。さらに、朝夷奈切通しが通る山も権現山と呼ばれており、この山中に熊野神社が祀られています。権現山は、日本各地にあり、仏が仮の姿（権現）として現れた山だと云われています。徳川家康も神号として東照大権現を名乗っています。

❖ 東照宮･･･慶長五年（1600 年）徳川家康公が鎌倉から金沢を経由して江戸に入る際に、この場所（円通寺）に立ち寄り、境内山頂より金沢の景観をご覧になり非常に満足されました。このことを秀忠（二代将軍）に再三語られ、その後、駿府への往還の際にも立ち寄られています。秀忠公が「父家康公がそれ程までに気に入られた地であれば」との経緯から、山頂に御殿建設の準備を進めましたが間に合わず、家康公の逝去後元和二年（1616 年）御殿に換え東照宮を建立しました。（関連資料 P47 参照）

（１４） 金沢に縁のある謡曲

謡曲は、能楽などに使われる詞と曲で「謡」とも云われ、室町時代に完成しています。脇能（神事能「高砂」など）、修羅物（男物「田村」など）、蔓物（女物「熊野」など）狂物（世話「隅田川」など）、鬼物（「山姥」「大江戸」）の五種に分かれます。作者は、観阿弥、世阿弥、禅竹などの能役者が殆どで、観世、金春、宝生、金剛、喜多の五流があります。金沢に縁のある作品は、「鵜飼」「放下僧」「六浦」などです。

① 謡曲「鵜飼」･･･房洲清澄から甲州石和に旅した僧が、鵜飼の亡霊に会い供養する話で、この冒頭に「行く末何時と白波の安房の清澄立ち出でて六浦のわたり鎌倉山やつれ果てる旅姿･･」とあります。日蓮の石和川伝説と鵜飼山遠妙寺の寺記に関連する謡曲です。

② 謡曲「六浦」･･･称名寺での旅の僧と青葉の楓の精との会話をテーマにした謡曲です。冷泉為相が青葉の楓（金沢八銘木の一つ）を詠んだ和歌と、尭恵の「北国紀行」を基に室町時代後期に作られました。江戸幕府公式記録「徳川実紀」に、城中で数十回の演目として「六浦」が演じられたとの記録があります。

③ 謡曲「放下僧」は、仇討ち事件ですが、詳細は前述 15 頁「放下僧」をご参照ください。

④ 謡曲「金沢猩々」は、武蔵野国金沢は山裾深く海が入り込む景勝地、「六浦」が舞台で酒の楽しみと景勝をテーマにした謡曲です。そこに住む酒慶が春宵（春の夕べ）の海辺で友との酒を酌み交わしていると、猩々(架空の動物）が海中より現れ酒席に加わります。酔いに興じて猩々が舞い、夜更け海中に帰る際、銘酒持参を約束し消えます。やがて猩々が再び現れ、宝の酒壷を与えます。酒慶らが「殊更、六浦が唐土西湖にも勝る、詩人もこれを誉め給ふ」と謡い、金沢の名勝を愛でています。詩人は渡来僧の清拙正澄を指します。

6. 明治・大正時代の金沢

（１） 別荘地金沢

明治期に入り東海道線、横須賀線などの鉄道が発達しましたが、金沢を通らなかったため、江戸時代には、江ノ島、鎌倉と並ぶ観光地として親しまれた金沢は、一時期、すっかり世間から隔絶された地となりました。しかし、横浜の開港により外国人が増え、料亭などもできて、多くの文人や政治家が好んで訪れるようになると､閑静な別荘地としてふたたび脚光を浴びるようになりました。

（２） **伊藤博文と明治憲法**

伊藤博文が井上毅、伊東巳代治、金子堅太三氏の協力を得て、明治二十一年六月から州崎の東屋で憲法草案を練ったことは、余りにも有名ですが、金沢が陸の孤島で世の雑音を断ち草案作りに没頭するには絶好な地であったためと考えられます。

当時、東屋に盗賊が入り、重要資料入りの柳行李が盗まれましたが金銭目的であったため、憲法草案の重要性が分からず、盗品の柳行李に入ったまま近くの田の畦地で発見されました。その後、博文がこのことを恐れ夏島の別荘へ移り、草案は明治二十二年に完成しました。

（３） **製塩の廃業と海苔養殖、蓮根栽培の普及**

明治以降の金沢は、農漁業が主で六百年の歴史を有する製塩業は明治四十三年の製塩地整理の法律公布で全て廃業しました。この名残として、現在も六浦に「塩場」の地名や屋号が残っています。明治十年に遠浅の海岸を利用した「海苔」の養殖が始まり、同二十三年には室の木で牡蠣の養殖試験場ができ、本格的な養殖事業が開始されました。明治三十三年に町屋の柴田虎吉が浜名湖から蓮根の種を取り寄せ、泥亀新田を中心に金沢全域から追浜まで蓮根栽培が普及し重要な農産物となりました。

（４） **町村分合改称令（金沢村、六浦荘村、峠村（朝比奈））**

明治二十二年に町村分合改称令により、富岡村、柴村、谷津村、寺前村、町屋村、泥亀新田村、洲崎村、野島村を合併し金沢村に、三分村と釜利谷村は合併して六浦荘村となりました。

朝比奈村は当初相模国鎌倉郡峠村と言いましたが、明治三十年（1897 年）に久良岐郡に編入され六浦荘村大字峠村、昭和十一年横浜市に編入磯子区朝比奈町、昭和二十三年に磯子区から分離独立し、金沢区朝比奈町になりました。

（５） **義務教育の始まり**

明治五年に学制が頒布され無学文盲の絶滅の名の下に義務教育が始まり、全国各地に小学校の前身である学舎が寺院等を利用し発足し金沢にも四学舎が設けられました。

①富岡・郷学舎（持明院）後の富岡小学校
②金沢・知足学舎（龍華寺）後の金沢小学校
③六浦・三分学舎（光伝寺）後の六浦小学校
④釜利谷・赤井学舎（満蔵院）後の釜利谷小学校

明治二十七年に金沢小学校、同三十三年に六浦三分小学校に夫々高等科が併設されました。当

時、尋常科四年（義務教育）、高等科四年、明治四十三年に尋常科六年（義務教育）、高等科二年になりました。

❖ 大正十二年九月一日関東大震災がおこり、東京近郊が再起不能と思われる大被害を蒙りました。この危機を緊縮財政で乗切る方針で、金沢でも学校統合が行われ六浦荘村の三分尋常小学校、釜利谷尋常小学校の二校を統合し六浦尋常高等小学校を設立しました。釜利谷尋常小学校の尋常科四年生以上の児童が山越えの六浦尋常高等小学校へ通うことに釜利谷の住人が反発し同盟休校を敢行し私立学校を建てて強力に抵抗しました。この事態を憂慮した先代の相川文五郎氏が資金協力し、白山道トンネルを広く改修して、児童が通学しやすくすることで、昭和二年にこの問題が解決しました。（関連資料 P37 参照）

（６） トンネルの開通による交通等の発達

❖ 明治四年郵便事業（横浜・横須賀・浦賀・三崎金沢の間）が始まり、武蔵金沢郵便局が開局し普通郵便集配を開始しました。

❖ 明治三十三年、六浦と逗子間の県道改修が行われ、池子トンネル開通しました。

❖ 明治四十年、現在の国道十六号線に、青砥バス停・鳥見塚バス停・東富岡バス停間の二箇所に富岡瑞道が完成しましたが、大正十二年の関東大震災で崩落、青砥トンネルは山側にもう一本増設、複式瑞道が再稼動し、東富岡側隧道は現在のような切通しに変貌しました。

❖ 明治四十四年、六浦と釜利谷間のトンネルが開通、村役場や通学が便利になりました。

❖ 従前は、八幡橋と寺前神社前を乗合馬車が運行されていましたが、大正十年、八幡橋と逗子間に乗合自動車が運行され、他所への交通が便利になりました。

❖ 大正三年に六浦信用組合、同十二年に金沢信用組合が設立されました。昭和二十六年（1951 年）六月、信用金庫法の施行で横浜信用金庫へ合併しました。

（７） 金沢の有名人

閑静で風光明媚な桃源郷であった金沢には料亭などが建てられ、外国人や多くの文人・政治家等の別荘もでき、多くの有名人が訪れることになります。

❖ 金沢ゆかりの主な有名人

① 伊藤博文

長州藩の下級武士で松下村塾に学ぶ。明治の元勲。洲崎の前に野本家に仮寓、明治二十年頃、瀬戸の料亭東屋や夏島別荘で明治憲法草庵を練る。（関連資料 P31、53 参照）

② 井上 毅

熊本藩士。伊藤博文の下で明治憲法制定に尽力。外務・文部・内務・大蔵大臣を歴任。元老

③ 大鳥圭介

播磨出身の幕臣。榎本武揚と函館仮政府奉行。維新の際函館立籠もりで投獄。明治元勲の一人

④ 田中不二麿

名古屋出身。明治初期に岩倉使節団に参加。欧米教育制度を確立する。教育行政家、枢密顧問

⑤ 松方正義

播磨藩の出身、首相・蔵相・元老。子息の幸次郎氏は美術品収集家、松方コレクションで有名

⑥ 三条実美

明治維新の元勲、公卿。尊王攘夷運動の先頭に立つ。明治四年（1871 年）太政大臣、内大臣

⑦ ヘボン博士

米国人の医師･宣教師。安政六年（1853 年）来日し慶応三年（1867 年）日本最初の和英・英和辞典「和英語林集成」を完成、ローマ字を創設した人である。

⑧ 川合玉堂

愛知県出身。日本画家の巨匠で自然と人々の生活をほのぼのと描いた。鏑木と大正九年より十数年間金沢が騒がしくなるまで富岡の別荘に居住する。

⑨ 野口英世

福島県出身。開港で外国からの伝染病防止施設長浜検疫所に医官補とし明治三十二年着任。黄熱病、梅毒、蛇毒の難病研究に業績。自身黄熱病に侵され病死。

⑩ 吉川英治

横浜生まれ（1,892 年～1,962 年）小説家。横浜に強い郷愁を抱き、昭和七年（1,932 年）寺前の農家を借り避暑。良く散歩で称名寺へ足を向ける。代表作には宮本武蔵、新平家物語、私本太平記など。

⑪ 直木三十五

本名植村宗一（明治二十四年大坂生）大衆小説家。43 歳で没。菩提寺は長昌寺。直木賞を創設（文藝春秋）主作品南国太平記、楠正成由良根元大殺記　（関連資料 P40 参照）

⑫ 鏑木清方

東京神田生まれ。明治、大正、昭和に亘り活躍。日本画「美人画」の大家。文化勲章受章者。金沢に因む作品は、君が崎漫筆･遊心庵漫筆、金沢絵日記。

7. 昭和時代の金沢

（１） 鉄道が開通

昭和五年湘南電鉄（京急）が黄金町⇔浦賀間、金沢八景⇔逗子間と開通し、静かな金沢に文化の波が急速に及ぶ時代に突入しました。

（２） 戦争の足音と終戦、高度成長

昭和に入り日本は急速に戦時色を強めていきました。軍港・横須賀に近い金沢にも軍需工場や軍事施設が進出しました。

【湘南電鉄のパンフレット】

① 兵器工場の進出

昭和九年日本飛行機（株）が昭和町、同十一年日本製鋼所横浜工場、同十三年日本兵器富岡工場が掘口、同十四年石川島造船所航空機部が昭和町、金沢山林四十万坪を買収した日本兵器などの兵器工場が進出しました。

② 追浜海軍共済病院

昭和十四年追浜海軍共済病院（現在の横浜南共済病院）が開院しました。

③ 国の兵器研究施設

昭和十六年小泉耕地を強制買収、追浜航空廠支廠（大軍需工場）が進出し、数万人の従業員が働きました。

④ 軍需道路の整備

金沢八景から朝比奈までは曲がりくねった細い道でしたが、昭和十九年に燃料廠と追浜航空廠を結ぶ相武隧道の貫通で大船との交通が便利となりました。朝比奈町は突然、街の真中に広い道路ができ、景観や住環境が一変しました。昭和二十年八月太平洋戦争終戦により、復員軍人の家族の急増で金沢区各町内に住宅建設が進み、人口は計り知れない速度で増加していきました。昭和二十四年の金沢小学校は児童数三千人超となり、横浜一のマンモス校となりました。

⑤ 横浜市立大学、金沢高校開校

昭和二十四年横浜経済専門学校、医学専門学校（現在の横浜市立大学）が金沢区に航空廠の建物を利用して設立されました。昭和二十六年横浜市立金沢高等学校が開校しました。

⑥ 高度成長と環境汚染、環境破壊

昭和三十年頃より、団地造成工事で里山を切崩し、工場誘致、海岸埋立が各地で行われました。人口急増に伴う自然環境の破壊は甚だしく、平潟湾への汚物流入、侍従川の汚染、交通渋滞などが進み、景勝地金沢の景観が短期間で急激に失われました。

（３） 上行寺東やぐら郡遺跡の発見

昭和六十年頃、上行寺東裏の丘でやぐら郡遺跡が発見され、著名な歴史学者や地元住民から、遺跡保存を行政に訴える動きがあり、この問題が地元で話題となり、マンション建設か史跡保存かで論争となりました。

マンション建設に伴う事前発掘調査の結果、やぐら四十四基、建物址十棟分、人骨百体以上五輪塔四百個以上な

ど、夥しい数の遺跡、遺物が発見されました。「やぐら」とは鎌倉、室町時代の墳墓の一種で、岩壁を四角に掘った横穴のことです。これは、鎌倉地方独特のもので金沢区内でも良く見かけます。

丘の頂上近くに岩を削って造成された平坦部には、胸上は失われていますが、東を向いた大きな阿弥陀像の坐像があります。すぐ前面に二間×三間の念仏堂、さらに南側に続く長径三メートルの池跡があり、これが極楽浄土蓮池を象徴しています。この阿弥陀像、建物、池などを備える遺構は鎌倉にも類例を見ない特異な遺構であると、専門家が指摘しています。

洲崎町にある龍華寺の「金沢龍華寺略縁起」に「源頼朝が六浦の山中に浄願寺を建立、この場所は高い山ではないが奇岩霊窟があり壇場を構える」など記されています。また、奈良の高僧「忍性」がこの寺に定住、律宗を広めたことや寺が火災に遭ったため東北の方角に移転し、「龍華寺」として再建したことが記されています。その結果、この遺跡は「浄願寺跡」との見方が濃厚となり、一部が復元保存されています。（関連資料 P45 参照）

8. 明治・大正・昭和の六浦

（１） 六浦藩から六浦県へ

明治二年（1869 年）全国的に府藩県制（版籍奉還）が敷かれましたが、横浜唯一の大名、米倉氏がいましたので、同氏領（宿、赤井、寺前、平分、寺分、社家分）6 ヶ村は六浦藩となり、明治四年（1871 年）七月廃藩置県により六浦県（知事米倉昌言）となり、同年十一月に神奈川県に合併されました。

（２） 六浦地域やぐら群の調査

上行寺を中心とした六浦地域のやぐら群は、昭和六十一年（1986 年）上行寺東遺跡保存の際に、周辺の遺跡調査が行われ、その結果、金龍禅院、泥牛庵、能仁寺跡、上行寺東遺跡、嶺松寺跡、お伊勢山、六浦二丁目個人宅裏墓地、長生寺、西ヶ谷戸Ａ・Ｂ郡の十一のやぐら群と、上行寺東遺跡四十一基を含む百五十基のやぐらが確認されました。このやぐらの大半が、室町時代（15 世紀初頭頃）に六浦湊に面した寺院と関係したものと考えられています。

＊六浦北部遺跡は、京急六浦駅から 250ｍの丘陵上（六浦五丁目）にありましたが、現在は住宅地となっています。昭和五十六年（1981 年）に発掘、遺構二十二口の横穴、二口の竪穴が確認され、この中には人骨片、石造物、陶器などが発見されています。鎌倉時代後半のものと見られています。

（３） **念仏講と庚申講**

念仏講は毎月当番になった家に集って、大きな繰り数珠を廻しながら念仏を勤める講でした。念仏講は女性のみの集まりで男性は庚申講でした。念仏が終了すると、夫々が持ち寄ったご馳走を戴く、賑やかな会食となり、主婦の息抜きの場でもありました。朝比奈地域が平成十八年（2006年）頃まで、三艘では現在も実施されているようです。

（４） **三分小学校の開校**

明治五年（1872年）学制制定に基づき、翌六年に川の光傳寺に三分学舎が開校、同十一年に高橋（たかばし）附近に移転し三分学校となり、明治二十六年に初代校長、平田恒吉氏のもと、三分小学校となりました。大正十五年には現在地に移転し釜利谷小学校と合併、昭和二十二年（1947年）に六浦小学校となりました。

（５） **六浦荘村が誕生**

明治二十二年（1889年）市町村制により、三分村（平分、寺分、社家分）、釜利谷村、泥亀新田飛地が合併して六浦壮村が誕生、同三十年（1897年）相模国に属する峠村が六浦荘村に編入されました。昭和十一年に金沢町と合併し磯子区に属しました。

（６） **池子随道の完成**

明治三十三年（1900年）六浦から逗子市に至る県道205号線にある池子随道（全長98.8m）が完成、同二十二年に開通している横須賀線（逗子駅）を利用するのに大変便利となりました。

（７） **瀬戸神社へ合祀**

明治四十二年（1909年）政府指令で、瀬戸神社に八社が合祀されました。＊は社殿現存、例祭を実施しています。

① 室ノ木「熊野神社」は伊邪那岐（いざなぎのみこと）命、伊邪那美（いざなみのみこと）命、速玉男（はやたまおのみこと）命
② 六浦「大神宮」は天照大神（あまてらすおおみかみ）
③ 瀬ヶ崎「＊稲荷神社」は倉稲魂（うかのみたまのみこと）命
④ 高谷「＊白山神社」は、菊理比売（くくりひめのみこと）命
⑤ 三艘「＊浅間神社」は木花咲耶比売（このはなさくやひめのみこと）命
⑥ 川「日光神社」は味耜高彦根（あじすきたかひこねのみこと）命
⑦ 川「＊諏訪神社」は建御名方（たけみなかたのみこと）命
⑧ 大道「＊山王神社」は、猿田彦（さるたひこのみこと）命

（８） **塩専売法の施行**

平潟湾の金沢塩田は、三艘辺り（六浦・塩場）・小泉下、谷津大沢辺り（内海）で早くから製塩が盛んでしたが、明治三十八年（1905年）塩専売法施行により姿を消しました。

（９） **白山道隧道の開通**

明治四十四年（1911 年）山越えの道に変わる通路として、釜利谷村と三分村を結ぶ白山道隧道（全長 110m）が開通、釜利谷村との交流が大変便利になりました。

（１０） **最初の国勢調査**

大正九年（1920 年）全国で最初の国勢調査が実施され、六浦荘村 4,219 人、金沢村 5,232 人、合計 9,451 人でした。

（１１） **関東大震災による大きな被害**

大正十二年（1923 年）九月一日に南関東を襲った関東大震災（震源相模湾北西部・Ｍ７．９、震度６）が発生、久良岐郡中で金沢村の被害が甚大で、全戸の約９割が全壊、全焼、大破であり、六浦荘村も住宅の約６割が被害を受け、金沢村で死者 43 名、負傷者 203 名、六浦荘村で死者 12 名、負傷者 85 名の大災害が発生しました。農業では農地の陥没、隆起、亀裂など、漁業では海底の隆起、干満の変化現象など、共に大きな被害が発生しました。

（１２） **湘南電気鉄道の開業**

昭和五年（1930 年）湘南電気鉄道（京急の前身）が黄金町～浦賀間、金沢八景～逗子間で開業され、金沢区内に二駅（金沢文庫、金沢八景）が設置されました。昭和十八年（1943 年）に池子地区旧海軍施設（弾薬庫）関係者専用の仮駅「六浦荘」が開業、昭和 24 年（1949 年）に金沢八景寄り 500mに「六浦駅」が移設開業しました。

（１３） **県営住宅の建設**

昭和十六年（1941 年）頃に横浜・横須賀の軍事施設拡張に伴い、金沢区にもこれに係る軍需工場（日本製鋼所・日本兵器富岡・石川島造船所・日本飛行機など）が進出、事業所に勤務する従業員・工員の住宅として、西大道住宅、大道県営住宅の建設が始まりました。この状況は、ほぼ金沢区全域に拡張されていきました。また、昭和十九年（1944 年）にこれに関連する金沢−大船間を結ぶ相武隧道が貫通、六浦原宿線が開通しました。

【大道県営住宅】

（１４） **大道国民学校（大道小学校）が開校**

昭和十九年（1944 年）六浦国民学校（現六浦小学校）より大道国民学校（現大道小学校）が分校し発足しました。太平洋戦争戦時下のため、校庭を開墾し薩摩芋を植生したとの逸話が

あります。太平洋戦争末期には戦況も悪化、昭和十九年（1944 年）八月には富岡･金沢国民学校が、翌二十年四月に六浦国民学校、六月に大道国民学校が夫々中郡・秦野村・足柄上郡上中村へ集団疎開（縁故疎開も有）を実施しました。昭和五十年（1975 年）朝比奈小学校・同五十三年（1978 年）高舟台小学校が、夫々大道小学校の分校となりました。

（１５） 金沢区の独立

金沢区は昭和二十三年（1948 年）五月に磯子区より横浜市１０番目の区として分離独立しました。区内の六浦・朝比奈・釜利谷・野島・乙舳・平潟・洲崎・大川・泥亀・寺前・金沢・町屋･柴･長浜･西柴･谷津･片吹･堀口･富岡の１９ヶ町が加わり誕生しました。面積２３．４㎢、当寺の人口は 51,765 人、11,694 世帯でした。その後、地域開発が進み、区内の急激な人口増加と発展により、平成二十七年九月一日現在は人口 202,579 人、88,108 世帯となりました。

（１６） 朝比奈新道が開通

昭和三十一年（1956 年）朝比奈新道が開通、金沢八景と鎌倉駅間をバス路線が開通し朝比奈切通しに変わる新しい地域重要道路（県道 204 号）となりました。この朝比奈十二所間２．２５ｋｍの道路建設にあたっては、当時、陸上自衛隊が社会的な認知を得る目的で、各地で演習を兼ね道路建設等を行いました。峠越えの難工事で三年の歳月を要して開通しました。

（１７） 東洋化工の大爆発

昭和三十四年（1959 年）十一月二十日、東洋化工株式会社工場内でＴＮＴ火薬試験中に発火、大爆発が発生しました。近隣の金沢高等学校も大きな被害を受け、生徒が緊急避難したほか、金沢区内でも爆風により広範囲で家屋損壊、外壁損傷、ガラス窓の破損など、住民に大きな衝撃と被害を与えました。被害状況は死者 3 人、重軽傷者 591 人、建物全半壊 57 棟一部損壊 1,060 棟に及びました。現在、東洋化工の跡地はマンションが建設されています。

（１８） 大道中学校の開校

昭和三十八年（1963 年）六浦中学校より独立分離、大道中学校が分校しました。学校が設置された場所は、元瀬戸神社の神領で神楽（かぐら）・祭祀（さいし）用の米を耕作する神楽田（かぐらた）で「かくらの谷（やと）」と呼ばれていました。

（１９） 大道・朝比奈地区山林開発

大道地区山林開発は、昭和四十一年（1966 年）大道と朝比奈に跨る山林開発が始まり、日通団地（現高舟台団地）が完成、昭和四十七年（1972 年）に日通団地の向側に三信住宅地の造成が完成しました。昭和五十五年（1980 年）大道地区山林開発の最終計画で、六浦三丁目六浦高宗台団地が完成、当地区内の大規模開発がほぼ終了しました。

（２０） 平潟湾の埋立

平潟湾の埋め立ては、五地区に亘り行われました。

① 六浦一丁目、四丁目地域･･･中世期には六浦湊として栄えた所で、近世は塩田となっていた地域で、大正末期に陸地化されましたが、資料が全く無く経過など不詳です。

② 乙艫町、平潟町、州崎町の南西地域･･･永島祐伯氏が寛文八年（1668 年）に開墾した泥亀新田と金沢塩田跡地。昭和二年（1927 年）金沢村耕地整理組合により農地となりました。

③ 六浦一丁目関東学院敷地南部・横浜共済病院地域･･･万延二年（1861 年）に造成された小上馬新田（こじょうましんでん）です。

④ 六浦東一丁目関東学院地域･･･昭和十年（1935 年）前後、軍用施設建設用地として海軍が埋め立てをしました。

⑤ 柳町地域･･･昭和四十一年（1966 年）に横浜市が埋め立て、宅地開発しました。この他にも、野島水道が横須賀海軍航空隊の飛行場拡張計画で殆ど埋められ、その代わりに野島運河が昭和十九年（1944 年）に開削されました。これらの埋め立てにより、平潟湾は数分の一の入江を残す狭い湾となりました。

（２１） 笹下釜利谷道路（笹釜道路）開通

港南区関の下交差点から中里・氷取沢・釜利谷を経て君が崎交差点（国道十六号）を結ぶ道路です。昭和五十一年（1976 年）に二本松隧道の貫通により開通。従来、谷津から能見堂に登り山越えで中里・関の下に至る保土ヶ谷道が、古来から使用されていました。公共交通機関では、京急杉田駅・屏風ヶ浦からバス便を利用する大変不便な環境でした。現在では、金沢から関の下方面（上大岡）を結ぶ国道十六号線のバイパス的役割を担う重要な幹線道路となっています。

（２２） 阿弥陀三尊像が重要文化財に指定される

平成四年（1992 年）大道山常福寺（じょうふくじ）（現宝樹院）の阿弥陀三尊像が県の重要文化財に指定されました。同年、東京世田谷の明古堂での修理の際、三体仏像内に貴重な納入品 17 品（文書・舎利）が発見されました。現在、阿弥陀三尊像は宝珠院の阿弥陀堂に安置されていますが、納入品は金沢文庫に収蔵されています。（関連資料 P43 参照）

9. 金沢の寺院

（１） 富岡山　長昌寺

富岡東３－23　臨済宗建長寺派　1,610 年（慶長十五年）仙渓和尚が開山、直木三十五の菩提寺となっています。本寺の裏に立派な御堂があり「芋観音」が祀られており、元は富岡総合公園入口附近に祀られていましたが、昭和十一年横浜航空隊の飛行艇基地開設でやむなく移転しました。この観音は、予防手段の無かった時代に天然痘（疱瘡）治癒の神として崇められ、多くの村人が恐ろしい病から逃れようと信仰していました。

昔は疱瘡のことを「いも」といい、里芋を茹で黒い皮をむき「きぬかつぎ」を作り芋観音様にお供えすると、治り難い疱瘡が芋の皮が剥けるようにすっかり良くなると信じられていました。

（２） 花翁山　慶珊寺

富岡東４－１　真言宗御室派　1,624 年（寛永元年）豊島刑部明重が建立、明重は徳川家康・秀忠・家光三代に仕えた旗本で、孝心に篤く忠誠の人物。寺は元不動院「宝龍寺」といい、海岸線（現在の富岡総合公園東端）にありましたが、老朽化したため現在地に移転しました。明治初期に、ローマ字創設で有名な米国人宣教師で医師のヘボン博士が、避暑のため逗留しました。（関連資料 P26 参照）

（３） 地福山　宝珠院

富岡町 1,888　真言宗御室派の寺、1,555 年に豊島信満が建立、本尊は大日如来です。寺号は創建当時の本尊地蔵菩薩の手に持たれていた「宝珠」に由来すると云われています。

（４） 海照山　持明院

富岡東５－８　真言宗御室派　寺の歴史は古く応長元年（1311 年）の大津波で流失後、天文年間に再興されました。1,545 年（天文十四年）開山源隆が再興、明治七年（1873 年）に富岡小の前進富岡学舎が創立されました。

（５） 楞迦山　悟心寺

富岡町 1848　　臨済宗建長寺派、本尊は地蔵菩薩坐像、脇仏に閻魔大王（鎌倉時代後期作）で、一月・八月に閻魔講が毎年行われています。開山は江戸時代の元和年間（1615 年～1624 年）折甫栄公禅師と云われています。

（６） **海蔵山　太寧寺**

片吹 181　元は瀬ヶ崎にありました。臨済宗建長寺派。本尊は薬師如来で、俗に「へそ薬師」と呼ばれています。源範頼の墳墓が本堂左側にあります。（関連資料 P15 参照）

昔、この村（瀬ヶ崎）に貧しい一人の少女が住んでいました。両親と早く死別し、命日に供えるものもなく、何とかして供養の費用を工面すべく「へそ」（紡いだ麻糸を機織にかけ易くする丸めた糸玉）を作り、村中を行商していました。

早朝から夕刻まで一つも売れず、日暮れて疲れ果て道端に佇んでいると少年が「母親からへそを買ってくるように頼まれた」と言って、少女の「へそ」を全部を買い取ってくました。お陰でどうにか両親の供養を済ませることができました。

本堂に座する薬師様に御礼を告げると、不思議にも薬師様の前に少年が買い求めた「へそ」が積んでありました。事の次第を和尚さんに告げると「それはあなたの孝心に感じた薬師様が、少年に化身して救って下された」と教えられました。それ以来、この薬師様を「へそ薬師」と呼ぶようになったという伝説が残っています。

（７） **赤井山　正法院**

釜利谷 4313　真言宗御室派　1,602 年（文禄十一年）創建、本尊は阿弥陀如来像。空海（弘法大師）が巡錫の際、水不足に苦難していた村人の要望で井戸（金沢七井）を掘り、加持したところ良水が湧き出ました。覗くと赤色をしていて、空海がこの水で不動明王を描き、護摩祈祷をしたのが寺の始まりといわれています。（関連資料 P26 参照）

（８） **北嶺山多聞寺　金蔵院**

釜利谷町 3383　真言宗御室派　1,500 年頃（文亀年間）創建

（９） **護法山　満蔵院**

釜利谷 3492　真言宗御室派　約 1,200 年前（平安時代の初期）蝦夷征伐の折、坂上田村麿が無縁追善菩薩を建立したと云われています。明治五年神仏分離令まで、手子神社の別当寺でした。

（１０） **竹巌山　禅林寺と荒痛文殊**

釜利谷 1,003　曹洞宗　1,493 年（明応二年）創建ですが、江戸初期まで廃寺で、坂本村の領主伊丹三河守永親が再興しました。ある夏、釜利谷の坂本村が暴風で荒れ、崖崩れにより文殊菩薩が土砂に埋まりました。村人が鋤・鍬で掘り越していると「あら痛や、あら痛や」と苦悶する声が聞こえ、恐る恐る土砂を取り除くと声の主は文殊菩薩でした。禅林寺に運び住職に一部始終を伝え、境内の竹岩山にお堂を建てもらい手厚く祀りました。以来、「荒痛文殊」と呼ぶようになりました。菩薩は行基作と云われており、現在は浅草寺に安置されています。

（１１） 福松山慈眼寺　自性院

釜利谷 1,066　真言宗御室派、開山は永正年間（1504 年～1521 年）で開基は不明ですが、伊丹三河守が永禄年間に、上総国嶺上で北条方武将として里見方との戦いで討ち死にした我が子である康信の菩提を弔うために建立したと伝えられています。伊丹家は藤原氏の流れをくんだ摂津国伊丹を拝領した武家で、四代目の三河守永親は小田原北条氏に仕え、釜利谷に住んでいました。

（１２） 白山　東光禅寺

釜利谷 1,442　臨済宗建長寺派　1,204 年（建仁年間）に鎌倉宮あたりに医王院東光寺として創建、1,282 年（弘安二年）に白山道へ移りました。本尊は畠山重忠の念持仏と云われる薬師如来で、脇仏として日光菩薩・月光菩薩が祀られ、重忠の愛用馬具・鞍・鐙・轡が寺宝となっています。

＜釜利谷やぐら遺跡＞

白山道奥公園の東側地域で発見された中世の遺跡です。昭和六十一年の発掘調査で、やぐら 8 基、東光寺廟跡、歴代僧呂墓壙 9 箇所、供養塚のほか三条の尾根道が発見されました。「やぐら」からも灯明皿、かわらけ、墓壙、供養塚から木棺の板や五輪棟、小鉢などが出土しました。尾根道の内、西側の道は、白山道磨崖仏から朝比奈切通しへの道が開通する前に利用された六浦から鎌倉への古道の痕跡と考えられます。

（１３） 寿楽山　長生寺

六浦 2－8－2　1,469 年（文明年間）
浄土真宗本願寺派。本尊は阿弥陀如来、文明年間に安房から金沢へ渡る船中で「蓮如上人」の教化を受け「頓乗」の法名を授かり当初釜利谷小泉谷にあった真言宗の無量院が、1,532 年（天文元年）に浄土真宗に改宗、改名し現在地へ移転しました。境内にある椿の古木は、寛永二十年の植樹で紅白八重絞りに咲き分け花びらが一枚ずつ散る珍種で、日月星という名が付いています。また、明治の幕臣、山岡鉄舟の「長生精舎」の書が伝わっています。金沢区内では浄土真宗は長生寺が唯一の寺で鎌倉組に属しています。

【山岡鉄舟の書　長生精舎】

（１４） 日光山　千光寺

東朝比奈 1－37　応永年間（1394 年～1428 年）の創建。侍従橋の近くにありましたが、昭和五十八年二月（1983 年）に現在地に移転、浄土宗。本尊の十一面千手観音菩薩は、照手姫の守り本尊でした。唐船が中国からの長旅で、積荷を鼠害から守るため猫を積み込み、当地に下ろされ住みついたものが金沢猫と云われています。千光寺には、猫供養の猫塚があります。（関連資料 P20、23 参照）

（１５） 常見山無量院　光傳寺

六浦 3－2－11　1,573 年（天正元年）創建、浄土宗。本尊は阿弥陀如来。六浦郷士の長野六右衛門が房洲へ旅した際に、暗夜馬を飛ばしていると馬前を遮るものがあったので槍を一撃して立ち去りました。翌朝、確かめると阿弥陀如来の首が落ちていました。仏罰を恐れ、首を拾い光傳寺に持ち帰りました。その後、鎌倉二階堂に胴体があると夢のお告げがあり、譲り受けて首と繋ぎ本尊として祀りました。首は春日、胴は運慶作と云われています。

- ❖ この寺に明治六年久良岐郡三分学舎（後の六浦小学校）が開設されました。
- ❖ 江戸時代後期に、金沢探勝の展望所が天満宮を祀る光傳寺裏山にもありました。武陽金沢八景を眺望する場所が従来の能見堂から六浦地域に移り、金龍院の九覧亭や鎌倉から金沢に入った道沿いにある光傳寺山（茶屋もあり）が観光客で賑わいました。（関連資料 P54 参照）

（１６） 高栄山高照寺　宝樹院と大道山　常福寺

大道 2－7　真言宗御室派　当初は高照寺と云い三艘にありましたが火災に遭い、1,650 年（慶安三年）現在地に移転しました。本尊は大日如来です。元・内閣総理大臣小泉純一郎氏の祖父・又次郎氏、父・純也氏の菩提寺です。（関連資料 P63 参照）

- ❖ 宝樹院が移転する前の室町時代に、この場所に称名寺末寺の常福寺（1,147 年開山、内蔵武直が建立）という寺がありました。行基作といわれる阿弥陀三尊像が同寺の本尊として祀られていました。

❖ この阿弥陀様が弘安五年（1,182 年）北条実時追善供養に称名寺本尊と並べ置かれた記録があり、丸みを帯びた強い肩や痩せ気味の体つき等、平安末期の造像の特色があり、平成四年に県重要文化財に指定されました。応永二十九年（1,422 年）鎌倉公方足利持氏の許可を得て関東管領上杉憲実（家老長尾忠政）の指図により、寺前に大道関所を設け称名寺の修繕費用を捻出したという記録が残っています。

❖ 内蔵武直の妻は卜部氏であり、吉田兼好の縁者です。

（１７） 六浦山　上行寺

六浦 2－2 - 12　日蓮宗（中山法華寺末寺）創建は建長六年（1254 年）、本尊は宗祖板曼荼羅です。開山は日祐上人（千葉氏十一代貞胤の義子）、開基は荒井妙法・日荷上人。寺宝は日荷上人の坐像です。この寺は真言宗の金勝寺と言いましたが、日蓮上人との船中問答の後に日蓮宗に改宗し上行寺と改名しました。日荷上人が身延山（山梨県）より持ち帰り植樹したという謂れがある「榧」の古木が現在も見事に枝を伸ばしています。（関連資料 P21、55 参照）

（１８） 吼月山　泥牛庵

瀬戸 11－15　臨済宗円覚寺派　室町時代初期、円覚寺十一世南山士雲禅師により鎌倉新田攻めにより滅亡した北条高時の冥福を祈願し創建しました。寺宝として北条高時像、黄檗版大般若経六百巻、十王図が伝わっています。境内に、永享の乱で自害した海老名尾張入道兄弟の宝篋印塔があります。

（１９） 昇天山　金龍禅院

瀬戸 10－12　臨済宗建長寺派 南北朝時代で約六百年前創建。寺の境内の昇天山の頂上にある九覧亭は心越禅師により、金沢八景の八つの景色の他に富士山を入れた九つの絶景が眺められるという意味で九蘭亭と名付けられました。江戸時代に金沢各所にある展望所の中で、能見堂と共に名を馳せた所で、金沢七石の「飛石」が院内にあります。（関連資料 P56 参照）

（２０） 野島山　染王寺

野島町 5－1　真言宗御室派　1,382 年（永徳二年）比丘尼了意により開山。1,405 年（応永十二年）義円和尚が野島山頂に草庵を結び、1,566 年（永禄 9 年）に山麓の現在地に移転し、善王寺より現在の名に改称されました。現在の学習塾にあたる寺子屋は、江戸後期の寛政期に広がり、各地の農漁村に作られましたが、八歳から九歳で入塾し、読み・書き・そろばんを教える子ども教育が漁村地区の野島では元禄年間に始まっていたという記録があります。

本寺には、それを伝える珍しい「筆子塚」があります。寺子屋で教えを受けた筆子達により、恩師である住職の追善供養塔四基（染王寺二基・正覚院（廃寺）二基）が元禄年間に建造され、現在も染王寺境内に建てられています。

（２１） 知足山　龍華寺

州崎町 9－21　真言宗御室派の準別格本山、本尊は大日如来像。1,189 年（文治五年）源頼朝が文覚上人の協力で、六浦山中に浄願寺を建てたのが始まりで、1,502 年火災にあい孝徳寺（鎌倉時代創建）と両寺を併合して現在地に移転、融弁（1443～1524 年）が開山しました。子院が四寺あり（華蔵院、引摂院、福寿院、広徳寺）、明治九年（1876 年）本寺へ合併、現存する地蔵堂は、子院引摂院末の金鳥山地福寺であったものを大正二年（1913 年）に龍華寺へ移転、平成十六年（2004 年）に建替えられました。梵鐘は 1,543 年（天文十二年）の鋳造、重要文化財に指定されています。この他にも脱活乾漆造り菩薩坐像、弥勒菩薩坐像など多くの文化財が発見されています。（関連資料 P34、57 参照）

（２２） 福船山　安立寺

町屋町 7－4　日蓮宗　当寺悟明が日蓮上人の弟子となり、名を安立院日悟と改め、文応元年（1260 年）日蓮宗に改宗し安立寺を創建しました。六浦の上行寺同様に、日蓮が立ち寄り説法した寺で「船中問答着岸霊場」と称しています。日蓮は金沢文庫を度々訪れ、この寺に止宿しており、日蓮ゆかりの寺です。

（２３） 法爾山　天然寺

町屋町 5－1　浄土宗の寺、1,540 年（天文年間）鎌倉材木座光明寺の十九世然誉禅芳和尚の隠居寺として創建、本尊は春日作と言われる阿弥陀三尊立像です。

（２４） 嗣法山　伝心寺

町屋町 16－28　曹洞宗の寺、本尊は釈迦如来で、宝治元年（1,247 年）鎌倉執権北条時頼により創建、宗祖道元禅師が同年八月から六ヶ月間にわたり当寺に滞在、説法したという云い伝えが残っています。寺宝として大般若経六百巻が伝わっています。

（２５） 三療山医王院　薬王寺

寺前２－23－52　真言宗御室派の寺、1,191年（建久二年）源範頼が瀬ヶ崎の別荘地内に持仏堂を建立し、薬師如来を祀って薬師寺を建立しました。真言の名を惜しんで、薬師寺は寺前村北に移転し三癒山遍照坊となり、室町時代の文明十一年（1479年）尊譽が現在地に移転し、天文五年（1536年）に寺号を薬王寺に改号しました。寺宝は大日如来坐像、弘法大師尊像、聖観音菩薩像、金剛胎蔵両界曼荼羅図（市文化財）、源範頼位牌などがあります。（関連資料P15参照）

（２６） 此木山　宝蔵院

柴町214番地　真言宗御室派の寺。創建年代は不明。1,312年（応長年間）の大津波で長浜千軒と呼ばれた村落が一瞬で海没しました。罹災した長浜の住人が避難先で一本の大木の下に集まり「此の木」の下に住んだということから「此の木村」となり、変化して「柴村」となったと伝えられています。当寺は一村一寺院の典型的なものです。

（２７） 金沢山　弥勒院　称名寺

金沢町212－2　真言律宗別格本山（本山奈良西大寺）、文応元年（1260年）金沢実時が別邸内に持仏堂を、文永四年（1267年）真言律宗に改宗称名寺を創建しました。開山は審海、本尊は弥勒菩薩で国の重要文化財に指定されています。寺宝は文選集注十九巻（国宝）、北条実時等四将像（国宝）ほか多数あります。また、亀山天皇の勅願所でもあります。金沢北条氏滅亡後も、足利氏・豊臣氏・徳川氏の支援があったものの、次第に衰微しました。江戸時代に豪商石橋弥兵衛氏、昭和時代に実業家大橋新太郎氏の二氏が寺の復興、整備に貢献されました。大正十一年（1922年）に境内が、昭和四十七年（1972年）に赤門から金沢三山の稜線内が国指定史跡に指定されました。（関連資料P9、19、20、25参照）

（２８） 高照山　三宝寺

金沢町98－6　真言宗御室派の寺。本尊は地蔵菩薩　昭和五十年に薬王寺の飛地境内に墓地が造られ、園内に創建されました。

（２９）見谷山　浄林寺

朝比奈町、臨済宗建長寺派の寺、朝比奈鈴野山麓台地にあった白山道東光禅寺の隠居場の小庵を寛文年間（1661～1673 年）頃相模国鎌倉郡峠村（現朝比奈）地域の村寺として浄林寺としました。明治初期に無住寺となり廃寺、現在は四間四方のお堂が残り、東光禅寺の管理となっています。

（３０）日輪山　旧・円通寺

瀬戸（金沢八景駅前）　天台宗の寺。金沢八景駅ホームから見える草葺屋根の佇まいは、旧円通寺の遺構で前面に広がる庭園後方（権現山）には東照宮が鎮座していました。万治元年（1,658 年）当地代官八木次郎右衛門が東照権現を祀り、領主久世大和守広之が領地を奉納、歴代住職が「円通寺新田」（現在の横浜市立大学前方）の開発を進めました。徳川家康軍が関が原戦（慶長五年九月）直前の六月に上杉征伐に向かい、この途中鎌倉（江ノ島･鶴ヶ岡八幡宮）を参詣、同七月に金沢の地を訪れています。明治維新の神仏分離令で当寺は廃寺、東照宮は瀬戸神社へ合祀されました。（関連資料 P29 参照）

（３１）金剛山　嶺松寺

六浦二丁目　臨済宗建長寺派　開基は 1,362 年頃千葉胤義、明治初年に廃寺となりました。代々の僧呂の墓が現存（現在、スシローの裏手）しています。北川氏、千葉氏の墓石があり、北川氏は六浦平分村の名主、千葉氏は鎌倉時代から明治維新まで、代々、瀬戸明神神主を務めた由緒ある家柄です。

（３２）福寿山　能仁寺

瀬戸（後に米倉氏陣屋が建つ）臨済宗建長寺派の寺　開基は栄徳二年（1382 年）関東管領上杉憲方、方崖元圭（建長寺の重鎮）が金沢の中心地に開山しました。本尊は釈迦如来像（朝栄作）で豊臣政権時代まで存続しましたが、十七世紀中頃に廃寺となりました。跡地に享保七年（1722 年）に米倉氏が陣屋を置きました。建長寺に同寺の棟札（梁碑）が残されたという謂れがありますが現存していません。

開山の方崖元圭の坐像（県重要文化財）は、現在は金龍院に安置されています。

10. 金沢の神社

（１） 瀬戸神社

1,180 年（治承四年）源頼朝が、伊豆三島明神の分霊を勧請し、鎌倉幕府をはじめ多くの人々に篤い信仰を集めました。金沢北条三代定顕により、嘉元三年（1,305 年）瀬戸橋が造営され、金沢文庫との往来も便利になり、金沢の中心の場所になりました。中世から近世の時代に、当神社境内で起きた仇討ち事件「放下僧」は、あまり知られていませんが、同じ時代に起きて有名となった「曽我兄弟仇討ち事件」とともに謡曲に謡われています。瀬戸神社には力石があり、長谷川福太郎という人が、八十五貫目の力石を海岸から神社まで担いで運んだという話が伝わっています。（関連資料 P13、14、15、16 参照）

【瀬戸神社の力石】

（２） 琵琶島弁財天

源頼朝が瀬戸神社を創建した時、御台所の政子が日頃信仰している近江琵琶湖に浮かぶ竹生島弁財天の分霊を瀬戸神社正面の平潟湾に出島を築いて勧請しました。祭神は市杵島姫命です。伊豆の流人であった頼朝が天下の大将軍に、政子が御台所（尼将軍）になったことにあやかるように立身出世の弁財天として信仰を集めました。金沢七石の「福石」が、この弁財天の入口に置かれています。（関連資料 P14 参照）

（３） 富岡八幡宮

1,191 年（建久二年）に源頼朝が難波国から蛭子命を勧進し建立しました。1,311 年（応長年間）に長浜千軒といわれた大津波がこの神社近隣で発生、富岡の村落は当八幡の加護により難を逃れ「波除八幡」と尊崇されました。当八幡の例大祭は七月十五日に行われ、全国的にも珍しい「祇園船の神事」が行われます。青茅で作る祇園船を馬の背に乗せ海岸へ運び、御座船で沖に流す神事です。三代将軍家光が、江戸深川の埋め立てを進めていた折、幾度か高波をかぶり工事が難航しました。そこで、金沢の富岡八幡波除八幡を勧進し、現在、江戸最大の八幡様として知られる「深川八幡宮」を建立し、無事工事を竣工させました。この経緯から、本宮である金沢の富岡八幡宮に江戸っ子が良く参拝するようになりました。（関連資料 P14 参照）

（４） 手子神社

1,472 年（文明五年）に小田原北条の家臣で釜利谷領主伊丹左京亮が瀬戸神社の分霊を勧請し、村落の安寧と鎮守（山の神、田畑の水源森林等を守る神）を祈願して総鎮守として祀ら

【親子狛犬】

れました。創建時は宮ヶ谷の満蔵院内にありましたが、江戸時代に現在地へ移転しました。宮ヶ谷はその名残です。この神社には珍しい親子狛犬があります。

（５） 小泉弁財天

現在、小泉弁財天は、手子神社の社殿左奥の岩壁をくりぬいた石窟の中にあります。昔は、手子神社のすぐ下まで内海が入り込んでいて、その汀に竹生島と云われる岩山があり、そこをくりぬいて造られた石窟に竹生島弁財天を分霊した小泉弁財天がありました。昭和 15 年の太平洋戦争の軍備拡張で追浜航空廠の支廠が造られた時に取崩され、小泉弁財天は、手子神社境内に移されました。釜利谷村の鎮守様として、厄除け、子授け、安産祈願など多くの住人が参拝し信仰されています。

（６） 寺前八幡神社

約六百八十年前に金沢北条三代貞顕が称名寺の七堂伽藍を完成させた時点で当神社の存在が記されており、鎌倉時代の創建と思われます。祭神は応神天皇です。当時は、寺前、町屋、州崎の総鎮守でありました。明治四十一年に近くの小社と合祀し寺前の鎮守になりました。

（７） 町屋神社

現在の祭神は、元和元年（1,611 年）天照大神の弟神で八岐の大蛇を退治した須佐之男命（牛頭天皇の別名）をお祭りしたのが始まりで、人間界の罪穢れや疫病を追い払ってくれる神様です。

（８） 洲崎神社

応長元年（1,311 年）当時、長浜千軒という大津波があり家を失った人々はやむなく州崎、町屋、野島を繋ぐ砂洲に避難しました。第六天（他化自在天）を奉じて住み着いたことが始まりです。現在は誉田別命が祭神です。明治三十六年に旧国道を造る際に、龍華寺脇の狭い境内に遷宮しました。

（９） **浅間神社（谷津）**

天保七年（1,836 年）に火災に遭い、社殿・記録資料を焼失したため神社の由来等は不明です。祭神は大山祇の姫神で木花咲耶姫であります。この神社山頂からは、金沢の景観や富士山、横須賀・三浦・遠く房総の山まで眺望できる一覧所でありました。

（１０） **稲荷神社**

野島村の鎮守様です。安貞二年（1,227 年）に建立され、祭神は宇迦御魂（稲荷神）で、殊に稲を司る神で産業の守護神でもあります。狐に縁のある神様と考えられ、狛犬ではなく狐が社を守護しています。

（１１） **熊野神社（柴町）**

日本民族の一部は南方から島伝いに北上した海洋民族という説があります。この謂れから海上安全と漁の守り神である熊野神社が祀られている地域があり、紀伊熊野三社を勧請し、柴岬大権現と称し崇敬しています。応長元年（1,311 年）の大津波でも神功により難を逃れ、罹災民をこの地に収容しました。罹災民の住んだ此木村がやがて一字となり現在の柴町となりました。

（１２） **熊野神社（朝比奈）**

仁治二年十一月に当時の執権北条泰時が朝比奈切通しの改修をした際に、工事の安全と六浦の津を守護する神社（安産の神）として地元民から崇敬されています。毎年九月十七日例祭が行われています。

（１３） **浜空神社**

昭和十一年十月に航空隊開隊と同時に伊勢山皇太神宮の分霊を勧請し、同隊の守護神として勧請しました。太平洋戦争で戦死（作戦に参加）した将兵や飛行艇の訓練で殉職した戦没者、約二千柱の御霊を合祀し、その英霊が祀られています。

（１４） **諏訪神社**

本殿は天保元年七月建立。明治二十六年（1893 年）の神社明細帳では氏子戸数は、二十五戸。大道小学校の南側の丘の小さな社です。祭神は建御名方命で川（字）の鎮守として、稚児初宮参り、七五三祝、月見祭など多くの住民が尊崇する氏神様です。諏訪の橋から諏訪神社を通る旧鎌倉街道は鎌倉と六浦を結ぶ重要な道路でした。

（１５） 浅間神社（三艘）

祭神は木花咲耶姫（このはなさくやひめ）、本殿は間口一間三尺、奥行一間一尺。明治二十六年（1893 年）の神社明細帳では氏子戸数は、三十四戸。祭神の木花咲耶姫は、瀬戸神社の祭神大山祇（おおやまつみ）の娘神で、高天原から降臨されたニニギノミコトの后となったと伝えられる皇室の直接の先祖に当たる女神です。

浅間神社は富士山に対する信仰の神社で、この三艘の浅間神社もその一つです。六地蔵は、季節に合わせてカラフルな服に衣替えします。

【浅間神社の六地蔵】

（１６） 山王神社（山王様）

大道、高宗（たかむね）の谷戸（やと）左側の階段を上り詰めると小さな社殿があります。境内からは、大道村から朝比奈村にかけての緑園を、眼下に眺められました。近くを流れる侍従川に架かる橋を「山王橋」と呼ぶのは、橋から神社までの道が広々とした大道耕地を貫く山王神社への参道だったからです。

猿田彦命（さるたひこみこと）を祭神に勧請、間口一間五尺・奥行一間三尺・境内約四十坪。創建の時期など詳細は分かっていません。大道関所が永享（えいきょう）四年（1432 年）に設けられ戸数が増えましたが、明治二十六年（1893 年）の神社明細帳によると、三分村（さんぶむら）大道（寺分（てらぶん））の氏子戸数は三十二とあり、村の氏神様として崇められていました。

地元民から山王様（さんのうさま）と呼称され、稚児初宮参（ちごはつみやまい）り、七五三祝、十月初旬の鎮守祭りなど、多くの村人が参拝し信仰しました。

11. 江戸名所図会に見る金沢の名所

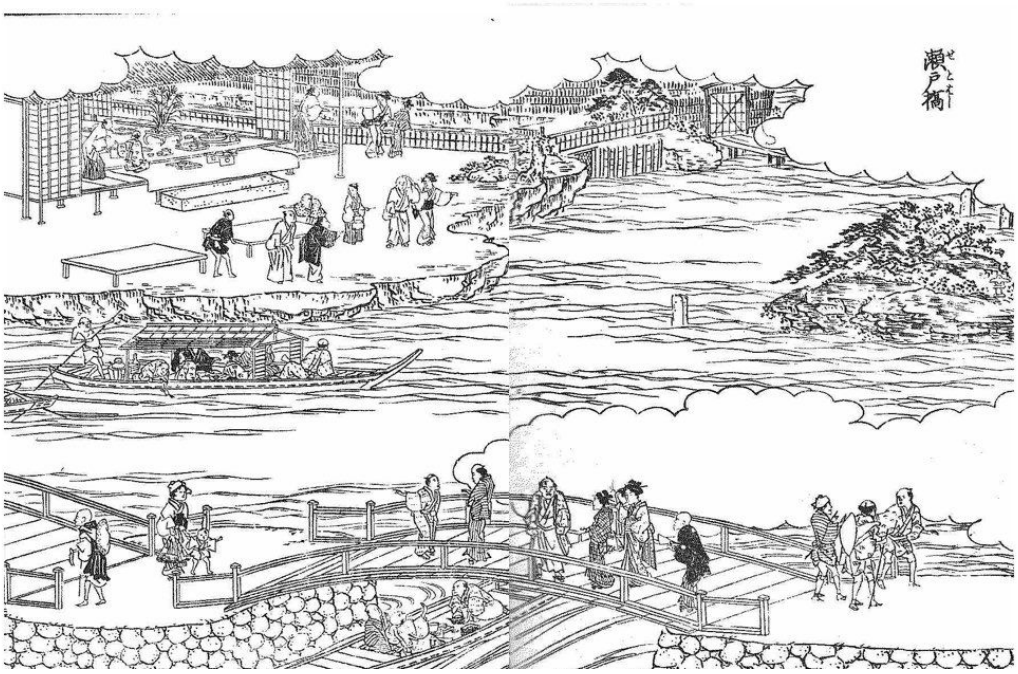
江戸名所図会（天保五～七年（1834～36）巻 20 冊）は、斎藤幸雄・幸孝・幸成の親子 3 代に渡って書き継がれた江戸とその近郊の神社、仏閣、名所、旧跡の由来や故事などを解説した書物です。挿図を描いた絵師は長谷川雪旦（※）で、細かいところまで緻密に描写しています。この図会の中に、江戸から遠く離れた金沢の名所も出ており、そこを訪れる人たちの様子がユーモラスに描かれています。その中から代表的なものをご紹介します。

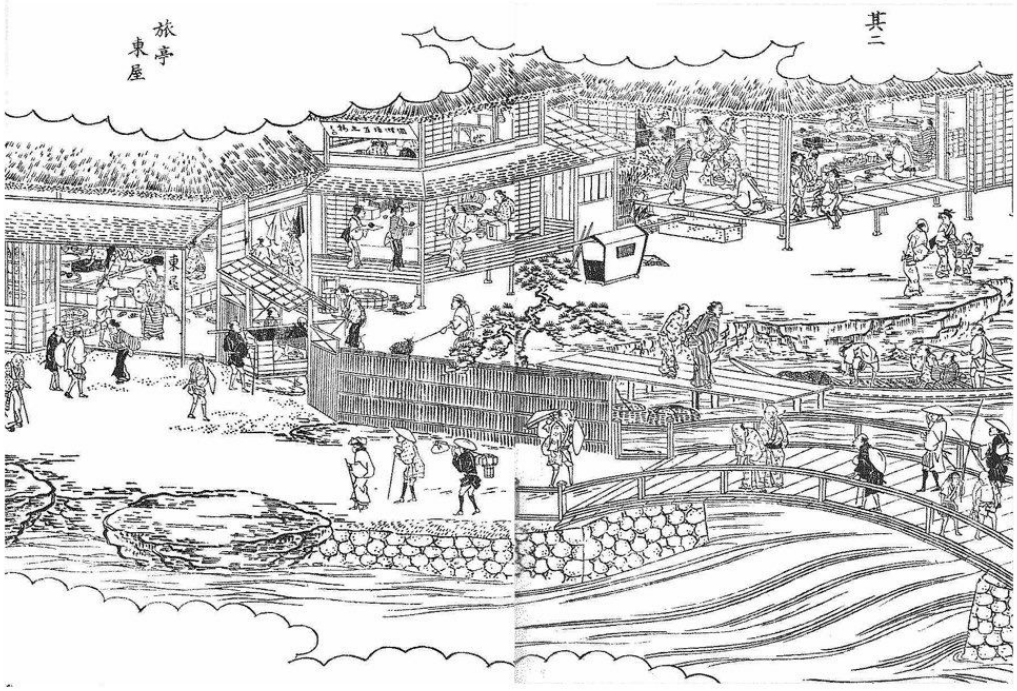
（１） 能見堂　擲筆松（てきふでまつ）

絵図左手に能見堂の茶屋が描かれ、左手の大松が筆捨て松と思われます。現在も残っている能見堂の石碑が中央下方にあります。その前方に、籠に乗った人は左方向へ進み、笹下、弘明寺、井土ヶ谷を経て保土ヶ谷（東海道）へ向かう旅人かと思われます。当時の能見堂の賑わいが良くわかります。

（２） **瀬戸橋　東屋**

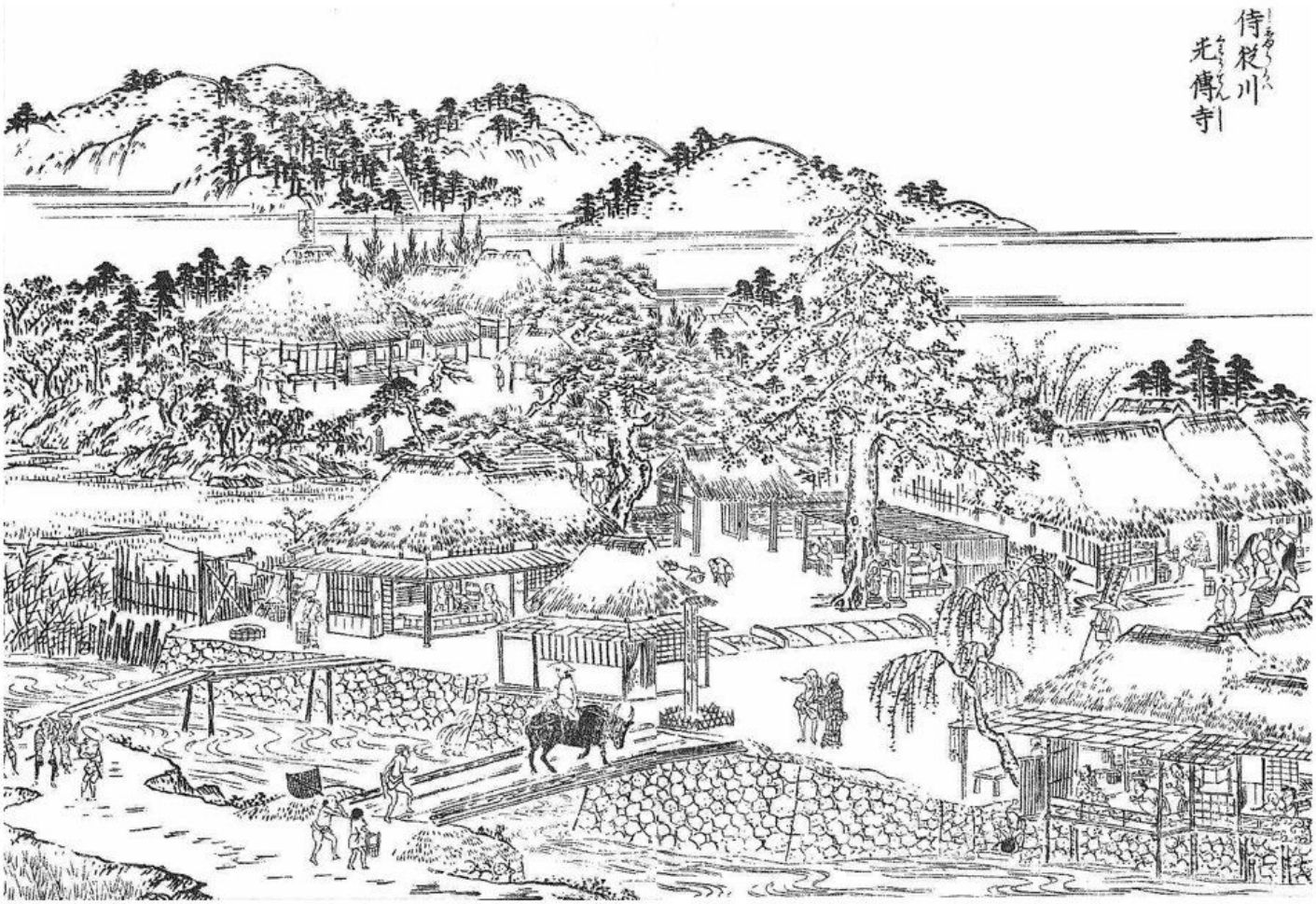
橋の向こう側が、瀬戸の内海です。瀬戸橋は中央に中島を造り、二つの橋を連結する眼鏡橋で、朝比奈方面から金沢文庫に向うのに、大変便利となり沢山の人が行き来しました。下欄の絵図には、料亭東屋が描かれています。東屋では平潟湾でとれた鯛や鮃などの新鮮な魚貝類が供され、この地を訪れる旅人が美味を味わいました。また、金沢八景見物と称して、入海へ屋根付き舟で遊覧をしている風景も描かれています。





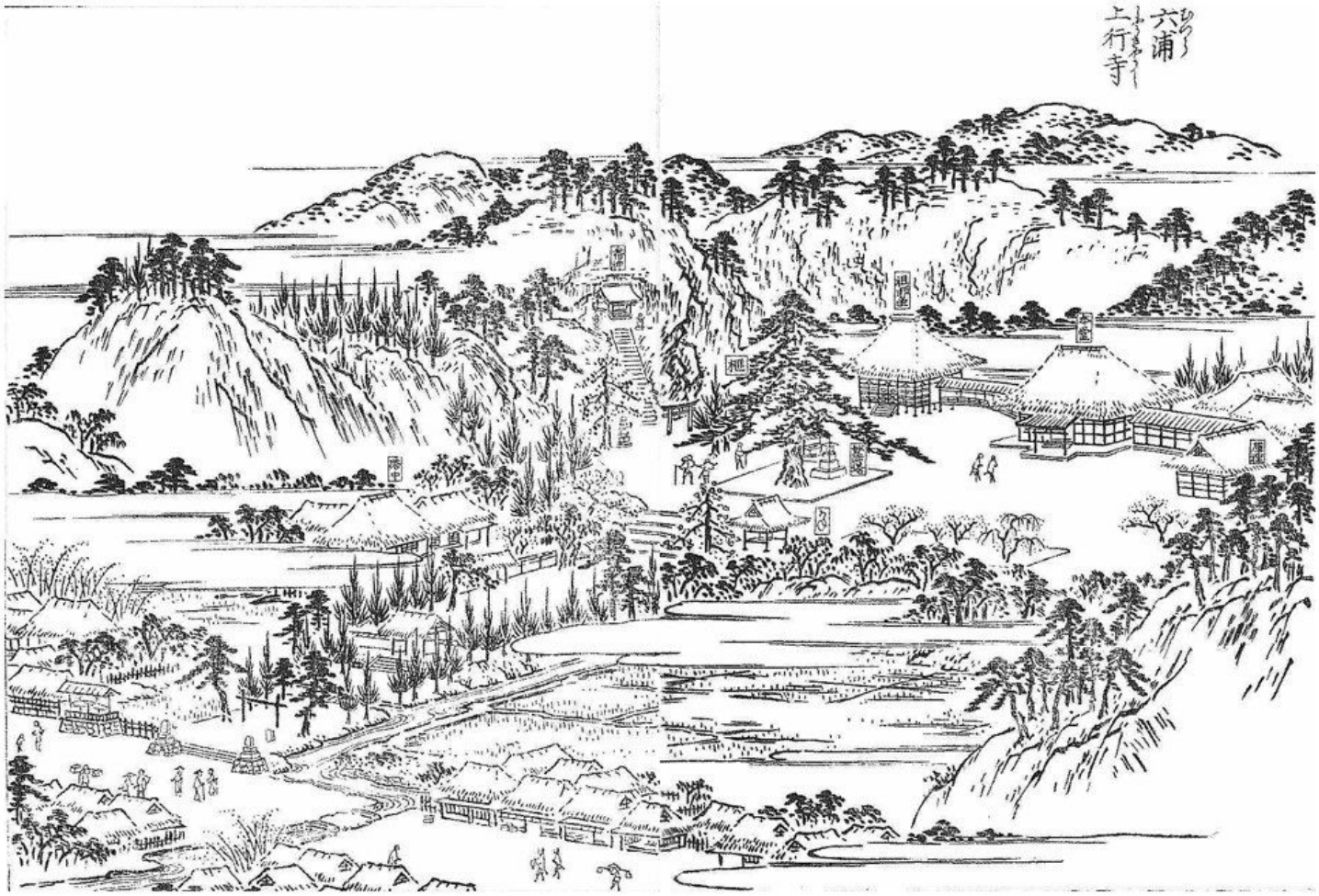
（３） **侍従川　光傳寺**

寺の前方には侍従川が流れています。侍従川の南側の道は、諏訪神社を経て鎌倉に至る道と思われます。この道を通って鎌倉から訪れる人々の往来も多かったのでしょう。今は、光傳寺の境内の前を環状四号線が走っています。絵図の下方に、牛に乗った人が侍従橋を渡っています。遠く後方の山腹には、大道村の鎮守様の山王神社の階段も伺えます。



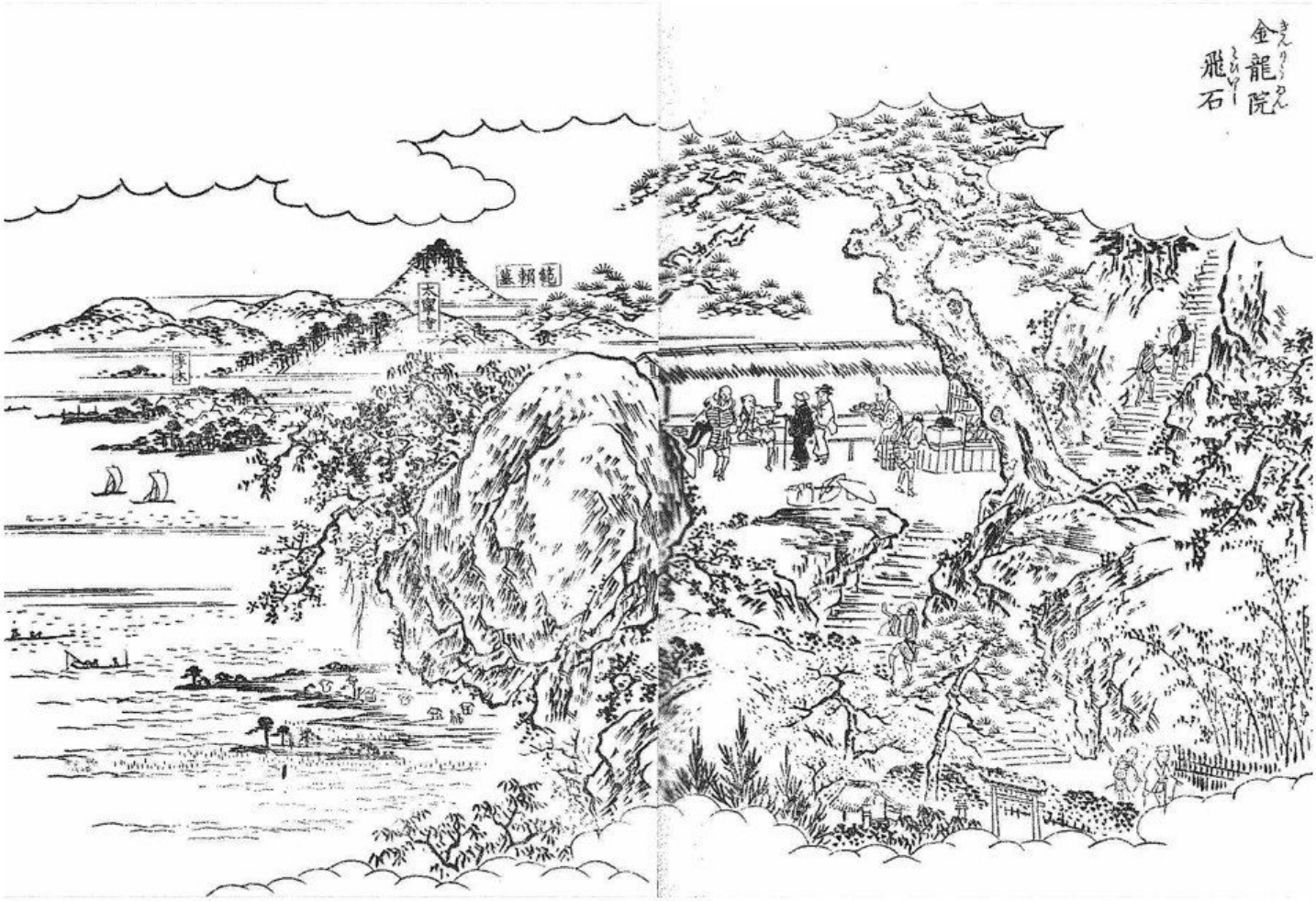
（４） **六浦　上行寺**

この寺が日蓮宗上行寺です。絵の中ほどに見える大木が日荷上人が山梨身延山より持ち帰り植樹したといわれる「榧の木」です。この絵が描かれたのは江戸の中期ですが、すでにかなりの大木でした。今よりも参道が長く、横には田んぼがあり、その前方に家が建ち並んでいます。この辺りから引越切通しを越え米倉様陣屋周辺は六浦の中心地であり、金沢八景を訪れた旅人を泊めた旅籠や、製塩業、農業を営んでいた地元住民の民家が描かれています。



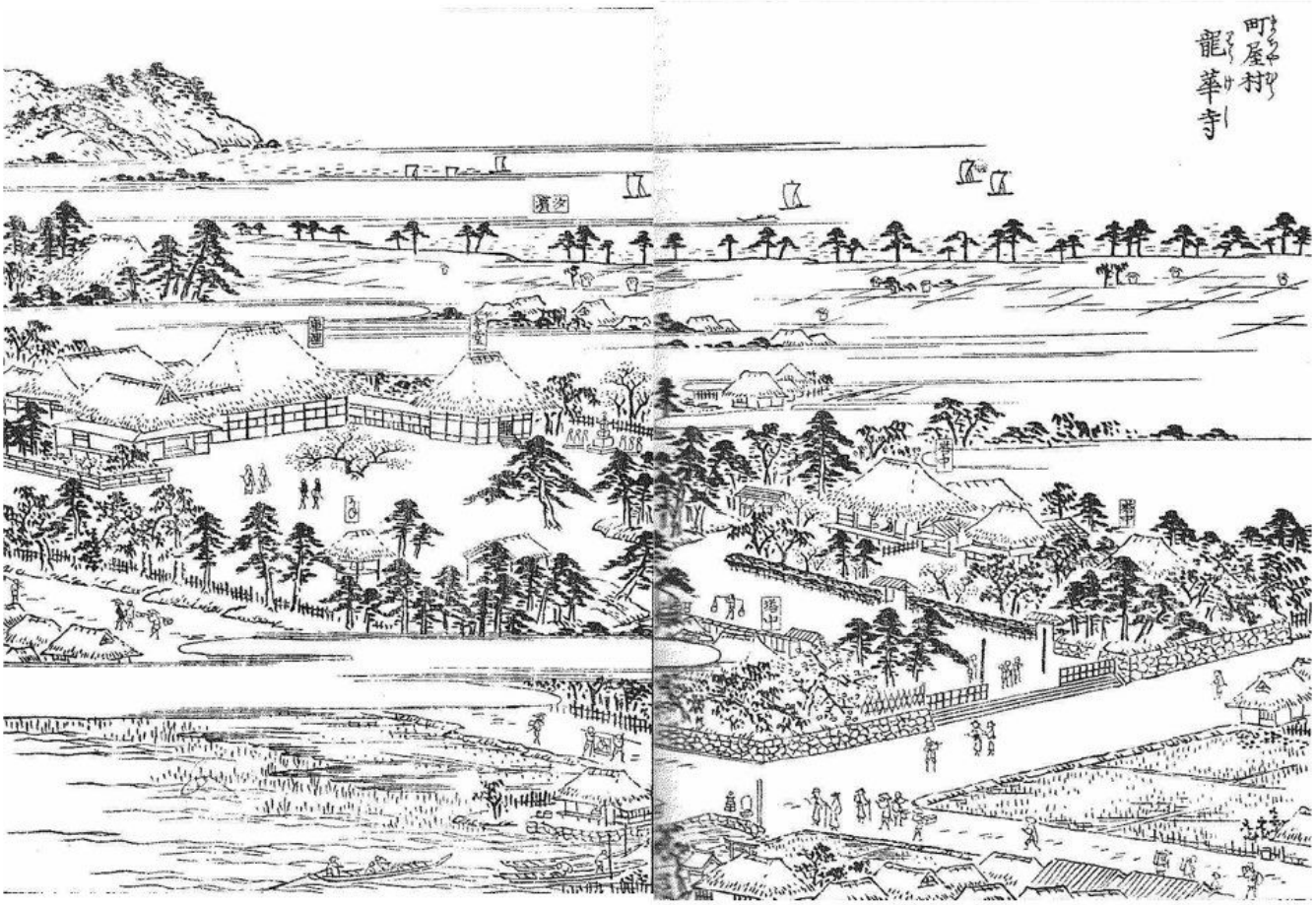
（５） **金龍院　飛石**

寺の境内にある飛石は、今では苔に覆われ姿形が分からなくなっていますが、この頃は石全体の輪郭が良くわかります。飛石の上に小さな祠がありますが、現在でも残っています。海岸線が近くに迫っており、平潟湾の対岸に瀬ヶ崎の太寧寺が見えます。右手には、九蘭亭に登る階段があり、急坂を杖をついて登っている人がいます。



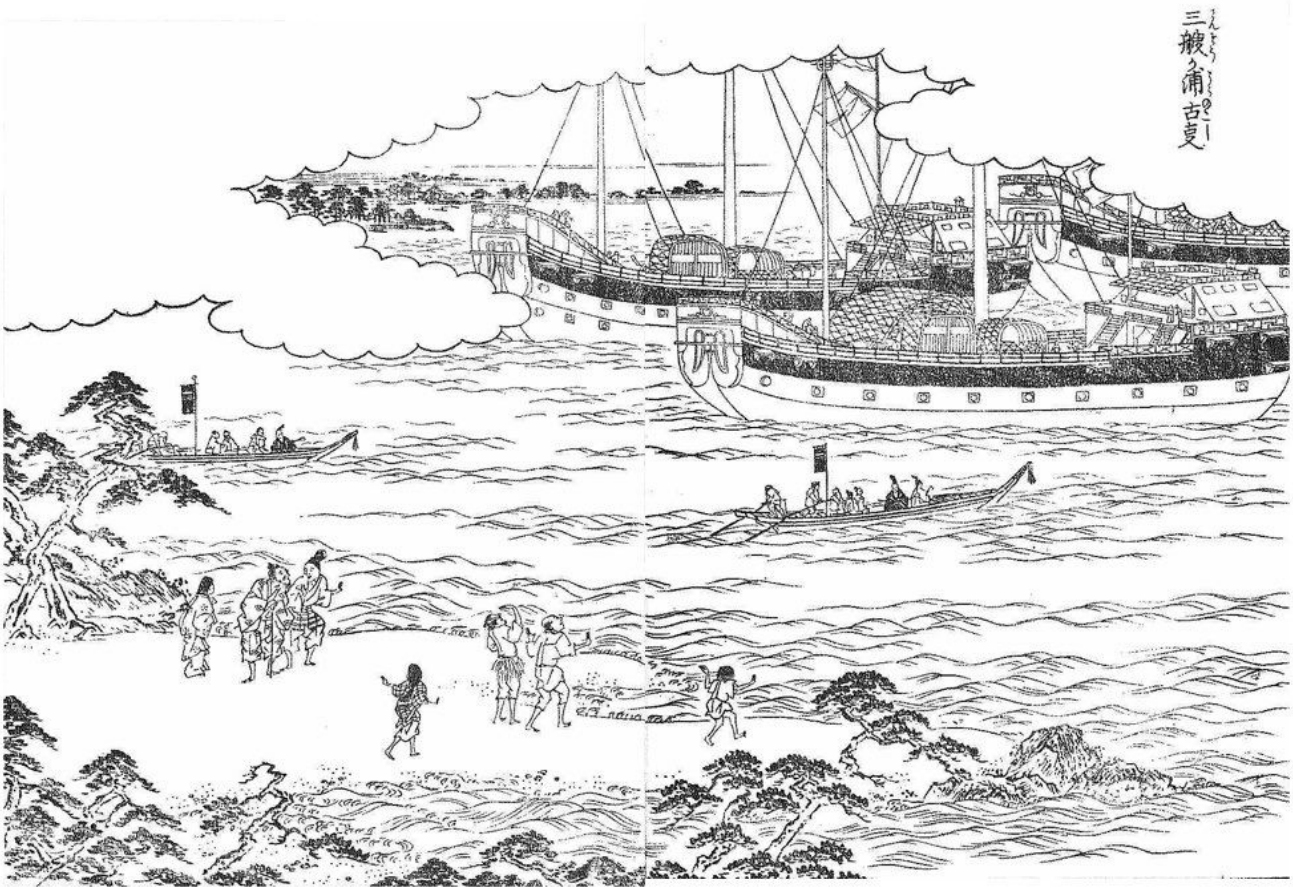
（６） 町屋村　龍華寺

中ほどに、龍華寺の本堂と大きな庫裏が見えます。境内は、今よりもかなり広く、天秤棒をかついで何かを運ぶ人や庭の梅の老木を眺めている人がいます。中央下の道には、子どもたちが楽しそうに話をしている姿や籠に乗った人が見えます。称名寺や能見堂につながる道と思われます。左手の奥の山は小柴の権現山と推測されます。乙艫海岸には松の木が整然と植えてあり、沖には、帆掛け舟がたくさん出ています。外海で漁をする野島や小柴の舟でしょうか。この辺りの地名は、現在は洲崎町になっています。



（７） **三艘ヵ浦の古事**

突然、唐船が三艘（さんそう）着いたことから「三艘（さんぞう）」の地名がついた、という言い伝えを裏付ける絵図です。確かに、たくさんの荷物を積んでいる大型船が三艘着岸し、そこに村人が小さな手漕舟で向かっています。当時、大変珍しい唐船を目の前にして、船の大きさや珍しい積荷に驚嘆し、子どもたちが浜辺では大騒ぎしている姿が描かれています。



（８） **鼻欠地蔵**

今は、風化してしまって原型をとどめていませんが、作られた時は、こんなお顔をしていたんですね。旅人が二人で、お地蔵さんに向かって話をしています。旅の安全をお願いしているのかもしれません。前方に流れる川は、侍従川と思われ、鼻欠地蔵の前は、かなり広かったようです。昭和十九年に相武隧道が貫通し、大船との交通が利便となった一方、環状四号線の開通で、この地蔵さんの直下に道路が敷設され地形が大きく変わりました。この辺りは、現在でも、「地蔵の前」と呼ばれています。

※ 長谷川雪旦（安永七年（1778 年）－ 天保十四年（1843 年））

江戸時代後期の絵師。江戸出身。唐津藩士の子。住居は下谷三枚橋（現在の台東区）。雪舟十三代を名乗る絵師の長谷川雪嶺を師とし、国立国会図書館には「雪旦・雪堤粉本」という大量の下絵や模写が一括して保存されている。天保五年から七年に刊行された『江戸名所図会』では、650 景にも及ぶ挿絵を描き名声を得る。

大道よもやま話

大道の歴史については、公の文献・資料など残っているものが少ないため、地元の長老からの言い伝えや、長年大道に暮らした廣瀬一雄（※）が残したメモなどを参考に、主として昭和初期の情景を「大道よもやま話」として纏めました。

（１） 大道の歴史

この辺りは金沢や鎌倉とも近く、軍事的・経済的に大変重要な地でした。大道の歴史も大変古く、鎌倉の玄関口として早くから開けました。

今から約八五〇年前の久安三年（1147 年）に常福寺が開山され、大道一帯が同寺の領地（寺分）でした。常福寺には行基作といわれる本尊阿弥陀三尊が祀られ、弘安五年（1182 年）北条実時追善供養に称名寺本尊と共に祀られた形跡があることから平安末期の造像であることが明らかとなり、平成四年に神奈川県の重要文化財に指定されました。常福寺は、中世末以降に衰微し明治初期に廃寺となった経緯から、宝樹院の横の阿弥陀堂に安置されています。

古文書によりますと、朝比奈峠が出来る以前鎌倉へ通じる道は二つあったようです。一つは諏訪社前を通り、尾根伝いに朝比奈の熊野神社の左側の谷を下って、大刀洗から十二所を経て鎌倉に入る道、もう一つは大道の西、鼻欠け地蔵の手前を右に登り「おおだわら」という所を通り抜けて天園に至り、鎌倉に入る道です。朝比奈峠が出来てからは、鎌倉へ塩を運ぶ塩商人が峠を越えて鎌倉に至ることが出来るようになり、大変便利になりました。

川村（字名）は、朝比奈峠が開かれて宿場として栄えました。宿屋（橋本や、伊勢や、清水や）花屋、湯や、足袋や、うなぎや、床やなどが屋号として残っています。また、金沢八景を眺望する場所が、従来の能見堂から六浦周辺に移り、金龍院の九覧亭や鎌倉から金沢に入った道沿いにある光傳寺裏山の並木天満宮が有名になりました。武陽金沢八景を眺めながら茶店で休息できる観光地として賑わったようです。

三艘は、平潟湾に近く六浦の津として栄え、唐船三艘が積荷（青磁の花瓶や香炉・蜀工錦等）を下ろしたことから三艘という地名になりました。また、唐船で運ばれた象が、六浦に着いた時には既に死んでいたため、村人がこの地に埋葬し「象塚」をつくったという由来があり「象が谷」という地名が残っています。

明治には大道村は神奈川県久良岐郡六浦荘村三分字大道となりました。戸数は三十二戸で昭和初期頃まで変わりませんでした。昭和十一年横浜市へ合併、横浜市磯子区六浦町になり、その後横浜市金沢区六浦町となり、横浜市金沢区大道となりました。

昭和十五年頃から、近郊各地で戦争準備（軍事施設の拡張・移転）が始まり、大道も農地が埋

められ、横須賀海軍の従業員用の住宅が建ち始めました。昭和十九年に六浦原宿線、相武隋道が開通し、大船、厚木へ通じる軍用道路となりました。

昭和十九年大道国民学校（後の大道小学校）が開校されました。

（２） 大道という地名の由来

かつて金沢は三分村と呼ばれていて、社家分、平分、寺分から成り、社家分は瀬戸神社の所領で、瀬戸から瀬が崎にかけての地域、平分は川、三艘から室の木までです。寺分は足利持氏の祈願所である大道山常福寺の所領でした。

仁治二年（1241 年）に朝夷奈切通しが完成した時に、大きな広い道に整備され、二間幅で当時としてはかなり広い道でした。このことから地名が「大道」になったと云われています。また、江戸時代の金沢八景の絵図では大道村近くに大きな橋が描かれていますが、これは現在の大道橋（別称：大橋道（おおはしどう））と思われますが、大きい橋のかかる道ということで大道という説もあります。

大道に関所があったことは余り知られていませんが、荒廃する金沢文庫と称名寺の再建修理費を捻出するため、三年間に限りに関所が設けられ、人は二分、馬は三文の通行料を徴収したそうです。一文は今の貨幣価値に換算すると 20 円位です。人別（戸籍）を調べるということは行わなかったそうです。昭和初期まで関所跡があったという話が残っています。

【塩を煮詰めた大鍋】

約六百年の歴史がある製塩業は、明治初年までは盛んでした。鎌倉の海岸は波が荒く製塩に向かなかったため、金沢から鎌倉へ塩を供給していました。かつては、上行寺の前まで砂浜が迫り、多くの塩場があり、人々の生活に欠かすことの出来ない塩の生産地でした。

また、侍従川の清流と豊富な水に恵まれ、良質の美味しい米が採れました。

侍従川の清流が運ぶ砂鉄で刀が作れることから刀鍛冶が住みつき、金沢各地で鎌倉武士の鎧、武具などの生産が行われていました。現在は、高舟台という地名になっていますが、地元では、高宗（たかむね）某という刀鍛冶が住んでいたことから、その字名（あざめい）に由来して「高宗（たかむね）」と呼んでいました。（「たかぶね」とも発音していたため高舟という漢字をあてたのではないかと推測されます）

（３） **大道の巡り歩き**

大道巡る歩き旅は川の諏訪神社（現在のヨークマート裏手）から始まります。参道を登って右の山側が「ふらいどう」と呼ばれている場所です。大道は二間幅の砂利道を西に向かって歩くと左手に「大島屋」（現在のレストラン「ココス」の辺り）、道を隔てた向かいに酒屋「大道店」があります。道の両側は田圃が続き一部蓮田もあります。

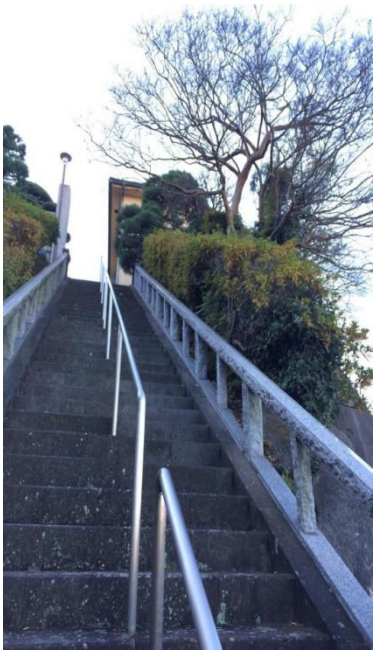
右手に川の光傳寺を見ながら、しばらく西へ向って行き（現在の大道小右側の道）小道を左へ入ったところが和田の谷戸です。入り口に「提灯屋（ちょうちんや）」「和田（わだ）」「紺屋（こうや）」などがあります。提灯屋や紺屋は大道をはじめ六浦荘村全体の祭礼用提灯の張り替えと、祭り半纏の染め抜きで大変賑わっていました。和田の谷戸は三浦一族杉本太郎吉宗の子和田義盛（わだよしもり）氏の居住地に由来すると云われています。

砂利道を少し歩くと右側に大道集会所があって、左かどが小泉純一郎先生の祖父である又次郎先生の生家です。現在は、駐車場になっており、小泉又次郎生誕碑が建っています。

小泉又次郎先生は、慶応元年（1865 年）武蔵国久良岐郡六浦荘村大道に生まれ、浜口内閣で逓信大臣に就任されました。その娘婿の小泉純也先生が防衛庁長官、小泉純一郎先生が郵政・厚生大臣に就任されました。追録ですが、小泉純一郎先生は、後に内閣総理大臣に、子息の小泉進次郎先生は、現在、衆議院議員です。このように子々孫々に渡って、わが国の政治の重要ポストにつく偉人を輩出されたことは、郷土の誇りであります。

この奥は杉の谷戸と呼ばれる場所で三軒の民家があります。

さらに西に向かって左の谷戸に入るとその奥に屋台小屋と消防ポンプ小屋があります。その向かいに「ちょうさん」と呼ばれる店があります。この店は塩、味噌醤油、砂糖、酢を計り売りし、駄菓子や乾物などの食料品や雑貨を販売する大道唯一の店でした。この辺りが大道の中心で、道路沿に数軒の民家が点在します。その先を左折すると山へ突き当たります。この山を「堂山」といい、登り口に常福寺跡があります。この山に掘られた横穴を「そこ免」と言い、関所に関連した場所と云われています。来た道を引き返して長い階段を登ると大きなサルスベリの木があり、宝樹院の境内です。境内の左側に常福寺の阿弥陀堂があります。



【宝珠院の階段とさるすべり】

十字路を右に入ると山王様の参道です。木材商を営む「せど」を過ぎて更に西に行くと左に折れる小道があります。この奥が大水谷戸（おおみぞやと）です。ここには三軒の民家があり、この谷戸は杉と雑木に囲まれた静かな山間（やまあい）です。現在のスーパー横浜屋の付近です。小川に沿って行くと大堰で、その先が堰の谷戸です。奥まで田圃が続く深い谷戸になっています。一番奥まった所に池があり、この池は村の所有で「大池」と呼んでいます。これは田圃に水を供給する溜め池で鬱蒼とした杉林に囲まれていました。

【昔の大道の田園風景】

大水谷戸から西へ行くと大橋道（おおはしどう）があります。その右側に小さな橋があり、この橋をドンド橋と呼んでいました。その横の三角地がお正月の門松飾りなどを燃やすドンド焼きをする場所です。左側は一メートル程高く田圃が続いています。ここが地蔵の前と呼ばれている場所です。右の山の崖に鼻欠地蔵が掘ってあって、ここが峠村（朝比奈）と大道村との境です。

左側を川に沿って行き橋を渡ったところが杉（すぎ）の先です。この奥が大鳥居（おおどりい）の谷戸で、しばらく田圃の中を奥深く行き、突き当たり左側の山に登ると「茅場（かやば）」で、毎年一月中旬に村人総出で茅刈りを行います。更に奥へ行くと道が川に入り込んでいます。

この辺りが「滝（たき）の沢（さわ）」という場所です。この奥右上が朝比奈の熊野神社方面で、左上が池子方面です。大鳥居を出て鼻欠地蔵の右側の細い道を登ると「小がくら」で右の奥の谷戸が「かくらの谷戸」です。現在の大道中学辺りです。この谷戸は水が少ないので雨を待って仕事をする場所で天水場（てんすいば）と呼ばれています。左の山裾を行くと「いが山」です。田のあぜ道を行くと川間（かわま）に出ます。ここを左に入ると山王様の鳥居の前です。この辺りはカナクソと呼ばれており、刀を鍛錬したあとの鉄くずが出た場所です。

毎年十月一日は山王様のお祭りです。当日はのぼりを立て、参道には灯篭を並べ鳥居の前には寿司屋（牛寿司）が出て参拝人をもてなしました。境内では豆の木を燃やして湯を沸かして無病息災を祈願したそうです。

山王様の奥が高宗の谷戸です。その昔、高宗という刀鍛冶が住み、侍従川の砂鉄で玉鋼（たまはがね）で刀を打ったという言い伝えから、ここを「高宗の谷戸」と呼んだそうです。奥右側が「夕日当り」である。杉、松の林に囲まれてエビネなどの草花が沢山ありました。左側のくぼ地が「隠（かく）れ里（さと）」です。

高宗の谷戸を出た左側に「お庚申様」があります。苔むした石塔に寛政七年四月八日建立と刻まれ、三猿（見猿、聞か猿、言わ猿）が彫ってあります。この辺りが「すもう免（めん）」と呼ばれ、左手の崖にやぐら群（五基）があり、今も現存しています。その先の左に「わきの谷戸」「大谷戸」「おもて」などを屋号とする五軒集落があります。左側の大谷戸には稲荷様が祀ってあります。木製の山王橋を渡って、侍従川に沿って左に行くと二軒の民家が並んでいます。この前の辺りが並木と呼ばれている所です。

山裾を侍従川に沿って行くと光傳寺（裏山が光傳寺山）の境内に至り参道を右に行くと諏訪の橋があります。これを渡り右に行った所が出発点で、ここで大道の巡り歩きは終わります。

（４） 大道の屋根替え

大道の戸数は三十二戸で、その殆どが茅葺屋根の家でした。そのため、村では茅場を所有し各戸の屋根葺替えは大体三十年に一度の割合で行われていました。毎年、1戸ずつ屋根替えを行うと三十二年目で順番が回ってくるという計算です。

お正月の行事が終わると、一月十五日位から茅刈りが行われます。この行事は村人が総出で行う作業で一人一人がナタ鎌で刈り取ります。

各自弁当持参で大鳥居茅場へ行く人、堂山の尾根伝いに行く人などがあり、山は大変賑やかでした。夕方になると各自が刈り取った茅の束5～6束を背負い、屋根替えの家近くの田圃端に積んで置き、二月～三月の屋根替えを待ちます。

屋根替えの当日になると、各人は金銭の代わりに編んだ縄を持って手伝いに行き、朝方は互いに顔がわかるが昼頃になるとススで顔が真っ黒になり、人別がわからなくなります。屋根屋さんは釜利谷の職人さんに依頼し、古い茅をはぎ取る作業、新しい茅を乗せて青竹（ほこ竹）で茅を押さえる作業が始まります。手伝いの人が屋根裏に入って外側から屋根屋さんが竹針のように縄を突き刺し、屋根裏の人が縄を付け替え、丁度糸で縫い合わせるようにして茅を固定します。

午後3時頃から屋根の刈り込みが行われ、屋根屋さんが屋根左右から大鋏で刈り込みます。この刈り込みが終わると屋根の形がきれいになり、丁度女性が髪結いに行って来たように綺麗

に仕上がり完成です。この光景を周辺から見守って見物する人々が誉めたたえます。

この行事（事業）を長く存続させるため、「屋根無尽」が行われていました。一定の掛金を拠出し、屋根替えの費用に充てるという仕組みでした。月に一回集まっての四方山話は楽しいものでした。この屋根無尽は村人の親睦目的で続いていましたが、自治会の旅行会などに変化し、後に、解消しました。茅葺屋根の家は、燃え易い茅材を使用することから、火災が発生しやすいという理由で立替えられ、現在は全く残っていません。

（５） 大道の青年会

大道の青年会は大道に住む三十二戸の長男は、必ず入会することが決まっており、尋常高等小学校を卒業すると直ちに入会したものです。年齢は 16 歳以上、入会するときは月に一度行われる常集会で全員に紹介され、その集会では必ず会食がありました。

私が入会したのは昭和十二年五月でしたが、その時の会長さんが天井好きな人で、わざわざ横須賀の桜屋の天井をご馳走してくれたことを思い出します。青年会は消防団とともに村の行事には必ず参加し、村の原動力になっていました。毎月、日曜日の夜七時から常集会が行われて、その月にあった出来事を発表する会でした。

その会では教養の向上を図ることも行っていましたが、それぞれ自由なテーマで意見を発表します。大道には教育熱心な方がおられ、その発表内容について様々な評価を加えてくれました。また、青年会の中堅以上の方を対象として自強会という会がありました。目的は、「自ら努め励むこと」を目標にした会でした。意見の発表にも自然と熱が入り、自分の知識と経験が発表されます。

戦争中は、日本国民皆兵といって、満二十才になる男性は兵役に行くことが義務づけられていました。そこで兵隊に行った時の経験や失敗談などを話して、これから兵隊に行く方が、参考にしたものです。また、青年会は教養だけでなく、青年会主催の家族慰安会も年一回行われました。内容は落語、講談あるいはハーモニカなどによる演芸が行われ、家族が一夜を楽しんだものでした。

七月十四日の天王祭は、早朝から各家で採れた野菜などを持ち寄り、煮ものやキュウリ揉みなどの料理を作り、祭りのご馳走にしました。このような青年会の活動により、大道から努力して立身出世された多くの方々が居られました。小泉又次郎先生もそのひとりです。

大道青年会を振り返ってみると、明日に向った内容のある行動規範が示され、諸先輩の方からの温かいご指導があり、本当に良い人生経験の場であつたことが思い起こされます。現在も、この様な組織や教育の場があれば、青少年の非行や乱れがなくなるように感じられ、もう一度「昔の青年会」のようなムードが漂う場が欲しいものだと思っています。

（６） **大道の四季**

（春）雪が溶けて最初に蕗のとうが顔を出す、蝋梅（ろうばい）の黄花が輝くころ、長かった冬に別れを告げる。田面（たづら）に張った氷も消えて、田圃に水たまりが出来るころになるとお玉杓子が泳ぎ始める。明堂（みょうど）（侍従川沿の民家）の吉野桜が満開になって、辺り一面花吹雪になり、竹藪では鶯（うぐいす）が鳴き田圃の土手には土筆（つくし）が顔を出し蒲公英（たんぽぽ）の花で埋まる。春日面（かすがめん）の猫柳も白金色（しろがねいろ）の芽を吹きはじめる。

（夏）五月になると水も温くなり農作業が始まる。稲苗も大きく育って子供たちは苗間に入りズイ虫（害虫）を取る。六月中旬夜間には夏祭りの太鼓の練習が行われ、威勢の良い太鼓の音が聞こえてくる。この頃からそろそろ田植えが始まる。　七月十四日は瀬戸神社の夏祭りで、瀬戸、六浦、川、三艘、大道の順に屋台が並び、各村中に屋台を繰り出し、大道へは丁度昼頃に到着する。夜になると小川や田圃の畦道で蛍が飛び交い、蛍を呼ぶ子供の声が聞こえてくる。

「ホ−ホ−蛍来い。あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、ホ−ホ−蛍来い。」

八月の暑い昼下がり大池の栓が抜かれる。池には鯉、鮒、泥鰌、川海老などが沢山いて子供たちも大人も夢中で魚取りに興じる。帰り道大堰（おおぜき）で泳ぎ、夕方から鼻欠地蔵前の広場に集まり田圃に水引をする。かくらの谷戸の蓮田では子供達が蓮の実取りに夢中になる。八月十五日はお盆の中日で、夕方から松明に火を点けて「虫送りの行事」が行われる。

（秋）田圃一面が黄金色に染まると、そろそろ稲刈りが始まる。伊賀山の周辺の土手では彼岸花が満開となって丁度赤の絨毯（じゅうたん）を敷き詰めたようになる。里山では百舌（もず）が鳴き、この頃になると山栗拾いが始まる。ここの栗は小粒だが甘くて味がよい。堂山（どうやま）から登って「お富士山」を廻り、茅場あたりまで出掛けると、子供が遊びながらでも袋いっぱい位とれる。十月一日は山王様の祭りである。幟を立てて参道には灯篭をぶら下げる。鳥居の前に寿司屋が出て参拝する人を持て成したと村の長老から伺った。十一月二十三日は収穫祭で、大道の田圃でとれた米は大変良質で、いつも一等米の評価であったと聞いている。

（冬）雪は毎年 2〜3 回降り、三十センチ位積もる。雪が降るとパッチンを作ってホオジロ、アオジなどを捕って遊ぶ。お正月には新しい服や靴を買ってもらい凧上げ、羽根つき、双六等に興じる。　一月十四日の早朝はドンド焼きの日で、前日に集めた門松や書初めを積み上げ焼き上げる。この火で餅を焼きこれを食べて無病息災を祈った。一月十五日頃になると茅刈りが始まる。村人が一つになり、協力して行う村総出の事業である。この行事が終わる頃には、里山の木々の芽もふくらみ四季は一巡する。

（７） **侍従川の思い出**

侍従川は、朝比奈峠を水源とし大道を縦断し、川、三艘を通り平潟湾に注ぐ清流である。川の名は、中世から伝わる照手姫の故事に由来する。

侍従川の水は清く、絶えたことがなく、お陰で大道は大変豊かな村であった。

現在、大道中学校のバス停の近くの岩に彫られた風化したお地蔵さんは鼻欠地蔵と言い、相州（鎌倉）と武州（金沢）の境に肥えた土地争いの仲裁役として建立されたが、争いがなかなか絶えないのでお地蔵さんが見せしめに、自ら立派な鼻を欠いてしまったと言い伝えられている。

この川はうねうねと曲がりくねり、自然の川そのままの姿をしており、両側は大名竹が生い茂り、遠くからでもひと目で川であることがわかる。

川間のネコ柳が白銀色の芽を吹く頃になると侍従川にも春がくる。川の土手には土筆（つくし）・蒲公英（たんぽぽ）・菫（すみれ）、蓮華（れんげ）・薺（なずな）など野草で覆われ、川岸の竹藪では鶯（うぐいす）が鳴き、鶺鴒（せきれい）・翡翠（かわせみ）・アオジが飛び交い、麦畑では雲雀（ひばり）がさえずる。

六月になると田圃に水を入れる大堰（おおぜき）が作られる。この頃から川の流量が減って子供達の川遊びの時期になる。大堰下の水溜まりには川海老（かわえび）、鮒（ふな）、ハヤが棲んでいて、子供たちは我先に網でとる。川の下流ではかい堀りが始まる。これは水をせき止めて中の水をかい出して魚を捕る方法で鰻（うなぎ）、泥鰌（どじょう）がよくとれる。

七月の七夕が過ぎ、夏祭りが近づく夜、川岸で蛍追いが始まる。夜露で衣服がびっしょりになるまで戯れる。八月末頃、大池の水が抜かれ、池の鯉・鰻が沢山いて大人も子供も夢中になって捕る。これは年一度の楽しみな行事である。秋になって水が不要になると大堰が開けられ

放水する。水の少なくなった川では鰻釣りが行われる。

十月頃、大潮になると諏訪の橋の上でハゼ釣りが行われる。十センチ位のハゼがよく釣れ、この魚は竹串に刺して焼き、お正月の昆布巻用として保存する。チンチンカエズ（黒鯛の子）や白魚（しらうお）も海から上がってくる。

秋も深まり稲刈りも終わり、雑木林に北風が吹き抜け、里山がすっかり冬支度を整えた頃、川岸には霜柱が立ち始め、川面は薄氷に覆われて侍従川も冬支度に入る。

久良岐郡六浦荘村字三分大道之図
昭和参年当時の大道
西
東
南
北
大池
かや場
ひのき山
滝の沢
大鳥居
杉の先
大水谷戸
堰の谷戸
竹林
大堰
お富士様
堂山
そこ免
宝樹院
常福寺跡
風来堂
和田の谷戸
杉の谷戸
関所跡
大橋道
どんどん焼
どんどん橋
地蔵の前
鼻欠地蔵
鎌倉迄二里
八景半迄里
諏訪の橋
集会所
川間
春日免
相撲免
山王様
神楽の谷戸
小神楽
侍従川
並木
大谷戸
稲荷山
お稲荷様
わきの谷戸
お庚申様
高宗の谷戸
夕日当
かくれ里
いが山
平成八年二月一八日
廣瀬一雄
（写）廣瀬隆夫

侍従川賛歌

一、緑深き朝比奈(あさひな)の　苔むす谷間若水に
　湧き出る清き流れあり　これぞ、名にしおう若水川(わかみずがわ)

二、若水川から侍従川(じじゅうがわ)　流れ流れて杉(すぎ)の先(さき)
　大道耕地(だいどうこうち)を見渡せば　大堰(おおぜき)近く水温む

三、大水谷戸(おおみぞやと)を右に見て　川間を流れ明堂橋(みょうどばし)
　諏訪(すわ)の橋(はし)から侍従橋(じじゅうばし)　並木観音(なみきかんのん)おわします

四、高橋(たかばし)過ぎて三艘(さんぞう)へ　あし原抜けて高谷(たかや)の里
　内川橋(うちかわばし)ももう間近　夕日に映える平潟湾(ひらがたわん)

五、侍従の流れ滔滔(とうとう)と　歴史を刻む清流は
　今も昔も変わりなし　清き流れよ永遠に

※ 廣瀬一雄(ひろせかずお)

大正 12 年 3 月金沢区大道生まれ。海上自衛隊横須賀造修所勤務、昭和 58 年定年退職。退職後は大道自治会長等を歴任。大道を愛し、晩年は郷土の歴史、自然、侍従川等について調査した。自らの体験をまとめた「大道よもやま話」のメモを残す。
平成 11 年 12 月 29 日没。

あとがき

金沢の歴史を紐解いてみますと、今と昔の姿があまりにも変わり果てていることに驚嘆しました。往時、静寂であった山里に、突然、建設重機がけたたましい音を響かせて侵入し、山々は崩され、美しかった緑園や豊かな自然は一瞬にして破壊されました。気が付けば整備された新しい都市型の住宅街が形成され、美しい里山や海辺には家が建ち並び、景色はすっかり変貌しました。

これは、文明開化、戦争、高度成長等を通して、日本の近代化に向けて社会や生活を変えていくための通過点であったとも位置付けられますが、今からでは取り返しの出来ない貴重な史跡や自然の破壊など、多くの代償も伴いました。現在、金沢八景駅前再開発が進められていますが、利便性を重視するあまり、周囲の景観を損なうのではないかということが懸念されます。

この金沢には、有史以来、何世代にも渡って人々が生活し、創意工夫をして様々な困難を乗り越えてきました。この地で、どんな人たちが、どんな生活をし、どんなことが起こったか、という史実から先人の教えや教訓を学ぶことは、明日の確かな未来社会を作っていくために、大変重要なことだと思います。今後、金沢がどのように変わっていくのか、変えてはならない事柄は何なのかを良く考え、将来を厳正に見つめていく必要があると思います。

朝比奈を源流として平潟湾に流れ込む侍従川は、まわりの景色や住む人々が変わっても、昔の姿を残してゆったりと静かに流れています。これからも決して枯れることはないでしょう。
この郷土の昔話や歴史、文化を、これからも子々孫々に語り継いでいただくことをお願いして筆を置きます。巻末まで、ご愛読いただきありがとうございました。

本書を編むにあたり、多くの方から貴重な助言やご指導をいただきました。この場をお借りして、心からお礼申し上げます。この本についてのご意見や、金沢の歴史について新しい情報等がありましたらお寄せください。

「参考文書」

1. 金沢と六浦荘時代　著者　平田恒吉（横浜市立六浦小初代校長）大正 3 年刊
2. かねさは物語　著者　関　靖（神奈川県立金沢文庫初代文庫長）昭和 13 年刊
3. 金沢の今昔　著者　杉山高蔵（横浜市立六浦小・富岡小・金沢小各校長）昭和 60 年刊
4. 金沢ところどころ　改訂版　金沢ところどころ改訂版編集委員会　平成 10 年刊
5. 私の語る金沢　金沢区役所（金沢区にお住まいの古老の皆様）平成 10 年刊
6. 図説かなざわの歴史　金沢区制五十周年記念事業実行委員会　平成 13 年刊
7. ぶらり金沢散歩道　著者　楠山永雄（金沢区の文学と歴史愛好会会長）平成 15 年刊
8. 新版かねざわの歴史辞典　金沢生涯学習　”和”の会　平成 19 年刊
9. ちくま文庫版　江戸名所図会　巻之二　著者　古市夏生　平成 21 年刊

かねさは今昔物語

発行日	2016 年 2 月 1 日　初版第 1 刷
編者	廣瀬健
構成	廣瀬隆夫
発行所	WAKINOYATO
住所	〒236-0035 横浜市金沢区大道 1-14-6
電子メール	takao_hirose@nifty.com

非売品

WAKINOYATO